聖典

泰山教學講授錄

（初門の卷 中編）

特261
428

始

特261
428

敬祖

加藤泰山講述

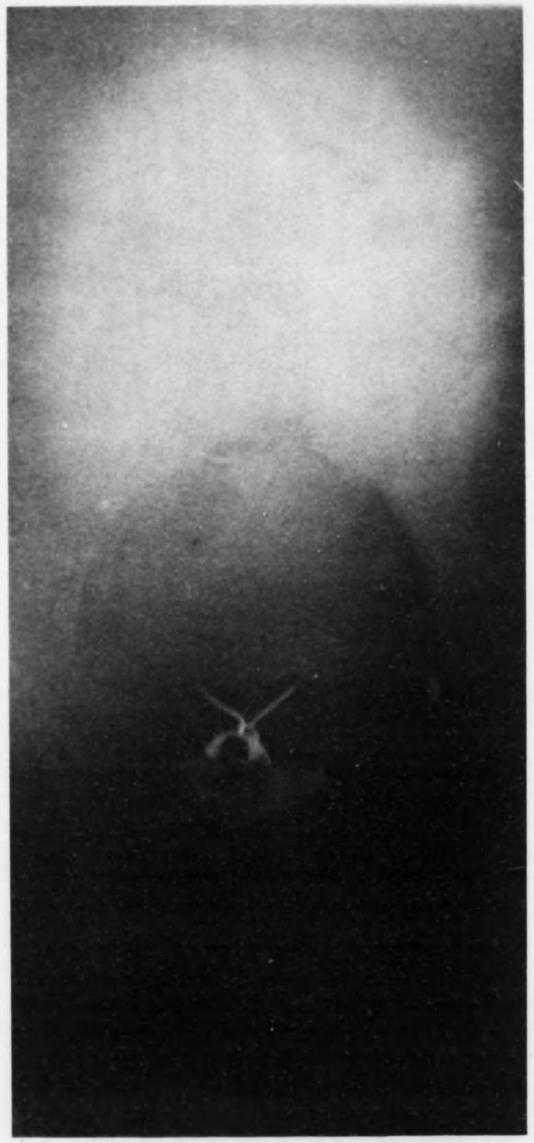
聖典泰山教學講授錄 中編

初門の卷

會津
若松

大日本哲學院藏版

昭和十二年
寄贈
帝國圖書館



泰山教々祖の靈光寫眞

佛祖釋迦の後光像、基督の靈光發現の畫等を見て、世俗は勿論、僧侶、宣教師までが、そは眞實でなく、人々に崇敬の念を起さしめんが爲の方便に殊更に作爲したる畫像であると妄斷して居るが、決してさうではない。

大悟正覺の靈體からは、如斯、靈光は顯現放射するものである。

誰人も入門して、泰山教を遵奉すると、靈力を體得し、靈光を顯現することが出來る。

昭和四年十一月一日午後八時より二十五分間に亘り薄暗き室に於て懇願謹寫（乾板には御顔現れ居るも印畫紙には露出せず）

高崎市フタバ寫眞館主　久保忠男

泰山教々祖の靈光顯現

昭和五年二月二十五日午後七時薄明る き電燈の下に於てフタバ寫眞館主久保忠男懇願謹寫

目次並ニ索引（中編）

○第九講　靈療學篇　……（自一　至三二）

病氣の定義…罪惡即病氣…醫學では病因不明…肺病豫防が肺病を作る…萬病一元…靈學療法の生理的現象…高血壓即時降下の實驗…靈學療法の感應現象…感應意識と治病功果…心安らかなれば病氣なし…不老完壽の秘訣…病魔滅却の靈法…醫學療法と靈學療法の別…醫術ではなぜ病氣が治らぬか…診察は推測なり…醫學の起源…偉大な超越せる靈妙の療法…自療し得ざる者は他療の資格なし…自他完療の靈學療法…靈學療法の無限價値…病氣は獨りで治る

自然療能の解…藥物療法の迂遠…敏速安全の靈學療法…西洋醫學の濫觴…自然療能力の本体

精神力が病氣を治す…賣藥は無害無効が原則…新藥多きは藥効なきを證す…人則犯と天則犯…現代に病人の多い理由

醫術は對症療法…病名なければ藥なし…松下博士の奇問…コレラの豫防注射…國士の悲壯な叫び…アンチピリンが高價藥…有金を捲き上げて突つ放す…驚くべき饅會の眞相…博士の凌辱…皮肉な若返り法…眞實の若返り法

醫は仁術なり…醫術の不完全は醫家自らこれを知る…醫の目的は醫なきにあり…泰山教の目的は泰山教の必要なきにあり…泰山教靈學療法と醫術及び其他の治療法との比較

○第十講　衛生學篇　……（自三三　至三九）

衛生の意義…衛生思想の發達は國民の健康を害す…ペイキン恐怖の觀念…福島將軍の衛生觀…人生は微菌と密接不離…最大危險思想…似非衛生學…眞實の衛生學…現代人は獸性に墮落せり…心行一如

○第十一講　靈　篇　……（自四〇　至七三）

靈の本質…色聲香味觸識無…超越善惡…超越有無…超越量位…超越時空…超越物心…超越差別

霊の作能…宇宙眞理は自由則…大靈尊無量慈悲…靈能立證…瀕死の病人委を現はして暇乞ひ…靈魂大根を運ぶ…生靈女を喰ひ殺す…殺されし婆の亡靈つきまとふ…叔父の亡靈と一緒に歸國…亡靈の乳にて育てられし赤兒…老婆の亡靈が預け金の取返し方を帝大講師島地氏に頼む…寺の娘の夢に現はれた旅人…念寫の實驗…觀音木像自由に出入…黄金の觀音空海を呼び止む…靈象は物質科學で説明不能…不思議なる靈象の解決…密閉の室内へ肉体の自由出入…肉體にて空中を自由に旅行…重きものは罪惡なり…政宗と村正の名刀…靈力淡々と湧出…神社佛閣の要なきや…根本觀念天地の差誤れる神佛觀…正しき神佛觀…神佛我と共に在り…金のために上下さるゝ神樣…首神と邪佛

○第十二講　力　篇　……（自七四至七八）

力の實體…自己の力を限局するの弊…依頼心の結果は損失…大自由大自在の作爲…天上天下唯我獨尊
力の發現の原理…大靈力は如何にして顯現するか

泰山教學 初門の巻（中編）

泰山教祖靈學療法主元　加藤泰山講述

第九講　靈療學篇

病氣の定義

泰山教學に於て病氣と申しまするは、人類及び一切衆生の圓滿幸福の生活を阻害するところの總てのものを指すのであります。即ち、諸種の煩悩苦惱、災厄、貧苦、疾患等はいづれも圓滿幸福の生活を阻碍するところのものであります。故にこれ等は總て病氣と申すのであります。

しかし、これから講義いたしますのは、普通いふところの病氣なるものに就てお話を申上げます。

定義

病氣とは健全なる精神の部分作用の鈍りたるを謂ふ

さて、病氣とは、文字の示す如く氣を病むのをいふのであります。然してその氣とは如何なるものであるかと申せば、肉眼で認め得ざるところのものであります。肉眼で認め得ざるところのものは何かと申せば、それは健全なる精神をいふのであります。健全なる精神が健康なる肉體を造るとは第二篇宇宙法則篇の中に述べて置きました通りで、精神健全であれば肉體は健康であるのです。

即ち病氣とは不健全なる精神の働きが健全なる精神の或部分の作用を鈍らしたのをいふのであります。

全精神が健全であれば即ち全體が健康であるのです。肺病といふのは肺といふ部分に不健全なる精神が働き、胃病といふのは胃といふ部分に不健全なる精神がはたらいて居るのであります。所謂黴菌なる物質も、腦と稱する物質もみなこれ不健全なる精神の發現したるものに外ならないのであります。

罪惡卽病氣

不健全なる精神—これは虛僞精神であります。一切の病氣は虛僞精神の發現したるものであります。卽ち罪惡の發現であります。かく申せば、王侯貴族等は或ひは冒はん。加藤泰山は飛んでもないことをいひ出した。病氣とは虛僞精神の發現したもの罪惡の顯はれであると……しかし、自分は未だ曾て虛僞精神を働かしたことなく罪惡を作つたこともないが、常に病氣で悩んで居る。と、されど想へ。王侯貴族と雖も二つ三つのその時より他の物を奪ひ取らんとし、又は種々なる生命體を殺傷し或ひは飲食しつゝあるではないか、これ正に瞋恚貪慾等の虛僞精神の働きであり罪惡である。況んや、王侯貴族と雖も前世に於ける虛僞精神の働きありたればこそ、この現象界へはみ出されて來たのでありますから、病氣にかゝるは當然といはねばなりません。實に王侯貴族ばかりではなく、因果の法則によつて一切の人間に病氣の發生するは、その理の然らしむるところであります。

醫學では病因不明

もとそれ、瘤を呑んで腹の中へ瘤が宿つたのでもなく、みゝずのやうな虫を呑んだので腹の中にそのやうな虫が居るのではない。それは皆、虛僞精神の發現したるものに外ならぬ。同じ家に住ひ、同じ空氣を吸ひ、同じ衣服を身につけて、同じ時に起き、同じ食事を爲して同じ時に同じ仕事をし、同じ時に休憩し、同じ時に寢る。斯くの如く、起居動作被服飲食その他一切同一の生活狀態にあり乍ら、甲は無病强健であり、乙は胃病であり、丙は肺病であり、丁は腳氣病で惱むとは、迚も物質科學では解釋が出來ないのであります。物質科學は肉眼で認め得るものより外に知ることが出來ないのであるから、今申したやうに、起居動作その他一切肉眼で認め得るの事柄は、甲乙丙丁何れも同一であるにかゝはらず、その結果は同一でなく各自異つた現象を呈して居る。之等の現象については物質科學たる醫學では決して分からう筈がないのであります。なぜかと申せばこれ等異る現象の原因は、肉眼で認め得る物や形ちでなく、肉眼で認め得ざる精神作用であるからであります。

肺病豫防が肺病を作る

先年、福島縣で衛生展を映畫に現はし、專門醫家をして辯士たらしめ、『こゝに映つたのは、肺結核菌であります。これは極微なるもので肉眼では見えず、檢微鏡下に依つて始めて認むることが出來るところのものであります。この結核菌は肺病患者の痰の中に無數に存するのであります。そして肺患者が吐き出した痰から飛散したる黴菌が他人へ傳染するのであります。一度これを感染するや肺を冒され、怒ち猛烈に繁殖し、病氣は容易に治る見込みなく、一生苦惱の裡に呻吟せんければならぬ。自分が一生樂しみを得ることが出來ない斗りか、家族には苦勞をかけ友人には非常の心配をかける。そしてまた他人へ感染さして他人までも苦しめることになる。實に恐るべきは肺結核菌であります。』と、滔々黴河の辯を振るはせた。然るに聽衆の中の三人が、數日後に於て異狀の發熱があり、寢汗なども出るので醫師の診察を受けたところ、肺尖加答兒との診斷を下された。肺尖加答兒とは肺病の初期であります。之を聞知した衛當事者は、大いに驚き、

肺病豫防のために催した衛生劇映畫會は、その目的に反し、却つて肺結核患者を出すに至つた愚を悟り、それからは再び衛生劇をやらなくなつたのであります。

聽衆中の三人は衛生劇の說明を聞いてなぜ肺病になつたのであるかと申せば、これまで左程に知らなかつた黴菌の實に恐るべきものなることの知識を得、これが爲に黴菌に對し甚大深刻なる恐怖の觀念が生じたる結果なのであります。恐怖心は惡魔であります、しかして之は虛僞精神であり不健全なる精神であります。不健全なる精神は宇宙の大法則に反するところのものであります。宇宙大法則に反するところのものは活動せず、活動せざるものは滅する關るものであることは、畢の公憲私憲に於て述べたるところであります。

右の三人は、衛生劇の說明を聞いて、あゝ肺結核菌といふものは實に恐ろしいものであると痛烈に感じ、その恐怖の强念のために肺臟といふ肉塊の作能を妨げ、肉塊の活動を鈍らしたのでその肉塊の一部が腐敗した。この腐敗したる物質を醫學では結核菌と命名したのであつて、名稱などは何うでもいゝ、兎に角、恐怖といふ不健全なる精神のはたらきによつて肺臟の一部分が腐敗したのであります。尙詳しく申せば、健全なる精神によつて作られたる健全細胞より組成されし肺臟の作能が、恐怖といふ不健全なる精神のためにその作能を妨げられ、茲に不健全なる細胞即ち結核菌の發生となつたのであります。

旨いというて物を多く食べる。これ貪慾といふ虛僞精神のはたらきであります。この虛僞精神のはたらきは胃病となつて現はれます。恐怖驚愕といふ虛僞精神のはたらきが一瞬をも潰すにいたつた實例は、畢に心身相關の理を說いたところでお話申した通りであります。

斯くの如く、如何なる病氣も不健全なる精神が健全なる精神の部分作用を鈍らしたものであります。以上の說明によつて病氣の本体が明瞭になりましたらう。また此說明によつて遺傳病に對する解決も出來ませう。遺傳病は父母祖先の虛僞精神が、子孫に傳襲しそれが發現したのであります。

萬病一元

既に說明したるところに依つて、衆山數の靈療學に於ては、各種の病氣の根源を一なりと確認し、その一なる根源は不健全なる精神そのものであると斷定してゐるのであります。病氣を癒すといふことは、この不健全なる精神を驅滅するをいふのであります。不健全なる精神を驅滅するには、絕大無限の偉力、即ち宇宙大靈の力を以て爲せば容易なることで、如何なる不健全なる精神も宇宙大靈の力によつて驅滅されざるはないのであります。

病氣を生理方面から見ますれば、如何なる病氣でも、血液が不淨となりその循環が不調和となり、また健全細胞のはたらきが不活發となつたといふことに歸着するのであります。

靈學療法の生理的現象

いま、加藤式靈學療法を施せば、生理上に如何なる現象を呈するかと申せば、血液は淸淨となりその循環は正調となり健全細胞の作能が活發となり、また健全細胞を增多し、新陳代謝機能は旺盛となる。勿論、血液中に白血球は增加する。而して病毒は氣孔から發散するか、又は大小便に混じて体外に排泄され、病氣が癒るのであります。

高血壓即時降下の實驗

わが靈學療法が疾病治癒の上に、如何に靈妙偉大なる効驗を顯はすものであるかを立證するには、腦溢血、中風症を誘起するところの動脈硬化血壓亢進症に試みるのが一番近道であります。高血壓患者に靈學療法を施すこと、十分乃至二十分間で、必ず即座にその血壓は二十ミリ乃至百ミリ以上の降下を見ます。血壓の降下は即ち血液の循環のよくなつた證左であります。現代醫學では到底治癒至難とする動脈硬化症に對して、斯くの如く即座偉効を奏するわが靈學療法は眞に世界無比の治療法といふも敢て誇張の言ではな

いのであります。

血壓亢進症を治療するには、初め血壓計を以てその血壓を患者自身に計らせ、而して之に施術を爲して後、再び患者に血壓を計らしむの方法を採りますから、その降下感覺は是程正確なものはないのであります。尚動脈硬變血壓亢進症の症狀等については、「靈光」誌に書いて置きましたから御參考までに御覽を願ひたい。

靈學療法の感應現象

また、この治療法を行へば如何なる感應があるかと申せば、各人一樣ではないが、多くは電氣に感じたる如く感應したといひ、又は、苦も憂みもなく、何等の煩惱も生ぜず愛愛に居るを忘れ、天國樂土に居るやうだといふのもあります。或ひは溫かい氣流へ浴つたやうに非常に溫かくなつたといふのもあり、又或ひはビク〳〵と脈の打つやうに感じたといふのもあり、腹の中が動いて來たといふのもあり、体内全部がビリ〳〵と一種の刺戟を感じて來たと申すのもあります。また、頭から全身にスーと何か感通したと思ふと、モウ覺えがなくなつたといふのもあります。また、神經が示現まし〳〵て精神は清淨となり、たゝ有がたさの氣に滿たされてしまいましたといふ者もあります。又は合掌したる手、或は全身に微動または激しき靈動を起すのもあります。或は又飛動や躍動を起すのもあれば、坐したるまゝ上半身が前面に屈して了ふのなどがあります。

稀には、何等の感應もないといふ鈍感なのもありますが、それとて二回三回と施術を重ねて行くうちには感應を意識することになります。それから、初回の感じと二回三回目の感じと同じでないのもあります。又全く感應意識のないのも萬に一つ位はあります。

感應意識と治病功果

しかし、感應の有無に依つて治病の功果に大なる影響を及ぼすものではありません。感應を意識するといふことは、その者の精神

への反映であります。しかして、靈は精神を超越したる絶對なるものであるから、その作能は患者の精神の識不識に關せず、病患部に靈化を現じ、以て治病の功果を奏するものであります。精神病者や幼年患者の如き感應意識なくとも、その病氣の治癒するを見ても明瞭であります。又同一症狀であつても感應だから早く治り鈍感だから癒りが遲いといふわけでなく、鈍感でも早く癒るのがあるのですから、その感應の權衡如何には餘り重きを置くの要はないのであります。

茲に述べたるところにより、如何なる病氣も不健全なる精神の現はれたるものであるといふことはお分かりになつたらうと思ひますが、尚次ぎに一層詳しく申述べることにいたしませう。

心安らかなれば病氣なし

私は第七講、構我觀に於て、空則是色といふことを申して置きましたが、その空即是色といふことは、一切の現象即ち物、形ちは空より生じたるものであり、その空とは眼に見えないものであり、眼に見えないものとは精神をいふのであると說明いたして置いたのであります。泣き悲しむといふ眼に見えない不健全なる精神の作用は、淚液といふ物質を造つてくるといふやうに、また腦のできてくるのも、骨の腦つてくるのも、皆其處に不健全なる精神が働いて居るのであります。怪我をして傷ついたのは、**細心**といふ至誠の精神が缺けて、**怠惰**といふ虛僞精神のはたらきの爲であります。機能的疾患であるとか、器質的疾患であるとか、又は內科とか外科とか醫術では病症及施術上に關し區別をして居りますが、わが靈學におきましては、更に何等の區別を要せず、如何なる病氣も如何なる癌も總て不健全なる精神の發現であると悟覺し斷定して居るのであります。

不老完壽の秘訣

如斯、一切の病氣や癌は不健全なる精神のはたらきに外ならないのであります。不老即ち何時も若々しき元氣でその壽を保つの

秘訣は、食物よりも何よりも先づ常に心を安らかに持つのにある。とは昔からいうて居るところであります。この心を安らかに持たうとするには常に至誠の精神を以て生活せねばなりません。虚偽精神の生活は必ず煩悩が發生して、決して心の安らかなることが出來ないのであります。

病魔滅却の靈法

一切の病氣は不健全なる精神のはたらきであるといふことは既に充分御理解が出來ましたらう。然してこの不健全なる精神を滅却しまするには、大自由大自在無碍なる絶大無限の偉力たる　宇宙大靈の力を以てせば易々たるものであります。皆さん方は既に大靈の力は體得されて居るのであります。その體得されたる大靈の力を如何にして發現し、また之を如何に疾病治療に活用すべきやは、この後の靈及力といふ講義を終り、それから、靈力顯現の秘法を御傳授いたしまするとと、既に御体得になつた、神秘なる大靈の力は皆さん方の体内から、滾々として無限に發顯し、忽ち自他の疾病治療、顯癖矯正等に活用が出來るのであります。

醫學療法と靈學療法の別

醫學療法即ち醫術は對症療法でありまして、診察をして病名を定め、それに適應する藥物を與へて治療するのでありますが。わが加藤式靈學療法はこれと違ひ、診察をして病名などを定むるの要なく、又、個々の病症に對して、各異の治療方法を講ずることを爲さず、如何なる病症も虚偽精神のはたらきであると斷定し、この虚偽精神を滅盡するに大靈の力を以てするにある。といふ頗る簡單な治療法であります。醫術に於ては病名を必要とする。そして昔は四百四病といふたから、病名も四百と四つあつたことであらうが今日は病名も殖えて八百八病位になつて居るやうである。しかし、いくら病名を多くしたからつて病氣を治せないでは仕方がない。醫術の目的は病氣を癒すにあらねばならぬ。ところが實際を見るになか〳〵病氣を癒し得ないので、醫藥治療の甲斐もなく所謂難病癒疾に惱むで居るものが、わが日本國ばかりでも常に五十萬人の多數に上つて居るのであります。全世界に於ては實に莫大の數になることだらうと思ひます。

醫術ではなぜ病氣が治らぬか

醫學ではなぜ病氣がうまく治らないのであらうか、それは醫學では病氣の宿る人といふものに就てその根源が不明であり、隨つて人といふものに對する觀念が根本に於て錯誤に陷つて居るからであります。物質科學たる醫學では人といふものは一個の器械であつて、その器械が原動力もなしに自動するものであると思ふて居るのであります。しかし、如何なる器械も火力とか水力とか電力といふ原動力なくして運轉する筈はなく、またその器械を完全に運轉するには技術優秀なる運轉手の必要があるのであります。即ち器械を完全に運轉するには、豐富なる原動力と技術優秀なる運轉手の技倆に俟たねばならぬのであります。しかるに醫學ではこの眞理を悟らず、人間といふ器械は原動力も運轉手も要らずに獨りで運轉しつゝあるものと誤信し、右の豹車が損じると一生懸命にそれを修繕し、今度は左の豹車が損じたとては熱心にその豹車の修繕をする。現時の醫術家の爲すところは、丁度器械鍛冶の仕事をして居ると私は思ふのであります。いくら修繕が旨く出來ても、即ち器械の破損は巧に修繕が出來たにしても、豐富なる原動力と技術優秀なる運轉士がなかつたならば、その修繕する後から〳〵と器械は破損するのであります。然らば人間なる器械を完全に運轉するに必要なる豐富の原動力と、技術優秀なる運轉士とは何を指すのであるかと申せば、それは健全なる精神と健全なる精神の力どであります。この健全なる精神と健全なる精神の力とがあつて始めて、人間といふ器械が少しの故障の生ずることなく、常に完全に圓滑に運轉することが出來るのであります。

診察は推測なり

また、醫術に於ける診察なるものは、唯、推測なるものであつて、決して斷定的のものでなく、頗る不確實なものであります。假令ば、或者が胃が惡いというて甲の醫者の診察を受けたところ胃加答兒なりとしてそれに對する藥をくれた。數日これを服用するも効能がない。それで今度は乙の醫者の診察を得けた。ところが胃酸過多症でありとして、それに適應する藥物を與へた。然るに之を數日服用しても何の効果もない。そこで今度は丙の醫者の診察を受けた。しかるに今度は胃擴張であるとの診斷の下にそれに適應する藥をくれた。胃の惡い同一人を捉へて、甲乙丙共、同じ醫術家にあり乍ら各々異る病名を附して各々異る藥を用ひる。何といふ不確實無定見なる治療術ではありませんか。わが靈學療法に於ては、病名などの必要はなく、ただその症狀がわかればよいのであつて胃が痛ければその痛みを除けばよい、腹が痛けるといふならばその痛けるのを取り消せばよく、胃のところが重苦しいといふなれば、その苦しみを輕くすればよいのであります。又、手や足が痛いとて醫師の診察を受けると。甲の醫師は神經痛であるといひ、乙の醫師はリウマチスであるというて、各々異る手當をするが、わが靈學療法では、そんな病名などの必要なく、手や足の痛みを除けばよく、手足が利かないならば、それを自由に利くやうにすればよいのであつて。醫術に比ぶれば頗る簡單で、而も誤診などの虞れは少しもなく、その効驗に至つては實に偉大顯著なることは今更申すまでも無く、過去の實績に徴し昭々乎たるところであります。

醫學の起源

世に醫學といふ學問の出來ましたのは今を去る二千年前の事でありまして、希臘のヒポクラテスといふ人が造つたのであります。ですからヒポクラテスは醫術の開祖であつて、醫聖と呼ばれて居るのであります。この醫學出現以來世界各國に於て、之を學びたる者數十萬人であるか實に多數に上つてゐる。そして二千年の長き間、孜々として不斷の研究を積み乍ら今日に及んだのである。道は人命に關する學術だけに他の物質科學の研究よりは眞劍味があるので、他の物質科學の研究よりは遲鈍で、近代に至つては殊に長足

の進歩をして、物質科學中に於て醫學は實にその粹であるとさへ謂はるゝに至つたのであります。洵に現代醫學は偉大なるものであります。

偉大を超越せる靈妙の療法

しかも、わが靈山教の靈學療法は偉大なる現代醫學の治療法を以てして尚治癒し得ざる所謂難病癒疾者を短期日において完全に治癒し得るのであります。しからば加藤式靈學療法は即ち偉大を超越したる治療法といふべく、眞にその文字の示すが如く靈妙の醫術と申すべきであります。

醫術家は自己又は家族が罹病した場合、數日間醫學療法を試みて更に効果のない場合に於ては、他の醫師にその診療を依頼することは常に行はれて居るのであります。自己の眼の蟲を逐へ得ざるものは他人の蟲を逐ふ力なし。といふ俗諺がありますが、これは俗諺であつても正に眞理であります。わが國の代議士中には一家の財政を紊亂し、父祖傳來の家産を失ふた者が之迄に澤山あります。一家の財政を治むることさへ出來ぬ者が、どうして國家の財政を治むることの出來やう筈はないのであります。自家の子女の教養の出來ざる者が、他の子女を教養するの資格なく、自己を救ひ得るの力なき者は他人を濟度しやうとしても到底濟度することが出來ないものであります。なぜかといへば、その事について確信がない。確信が起らないのは自己に偽りがあるからで、偽りあれば信念が生じて來ない。信念なければ力が顯はれない。力がなければ何事でも成し遂げることが出來ぬものであります。

自療し得ざる者は他療の資格なし

現代の醫術家等は病氣を治すの確信がない。若、確信があるならば、自己の病氣や家族の病氣を治し得なければならぬ。然るに自

分や家族の罹病に際し、他の醫師の診療を請ふの事實に徴すれば、自分の修得したる醫術なるものは、眞に病氣を癒すの力なきものであるといふことを證明して居るのであります。自分及び家族の病氣を治癒し得るの力なき者が、何うして他人の病氣に對し、確信を以て治療に當ることが出來ませうか。これを見ましても、現代の醫術は洵に不完全不徹底のものであるといふことが明瞭であります。

自他完療の靈學療法

泰山教の靈療學を修得すれば、自己の病氣は勿論、家族の病氣も完全に治癒することができるのであります。かるが故に他人の病氣に對しても確信を以て治療することが出來るのであります。

靈學療法の無限價値

現代の醫學を學修し醫術を体得しまするには十年餘の長き年月と巨額の費用を要するのであります。そしてその學修したる學理を實施するに及んでは、その取扱ふ患者の幾プロセントを治癒し得るのでありませうか、その半數をだに治癒し得ない實狀であるのです。斯くも長き年月と巨額の費用をかけて漸く修得し得たる醫術を以てして尚治癒し得ざる難病癖疾者を現實に治癒し得るところの、泰山教靈療術を僅一週間か十日間の短日子に於て完全に學修体得し、これを直に實施し得ることを思へば、本教學の價値は到底金錢などで測る可きものでないことがわかる。

病氣は獨りで治る

さて、およそ病氣なるものは藥物器械等によらずとも獨りで癒るべきものであります。それは、何をしなくとも獨りで病氣を癒す力、即ち自然癒能力といふのが生れ乍ら備はつて居るからであります。この自然癒能力と申すのは、實に人間斗りではなく、禽獸草

木その他ありとあらゆるものに生れながら備はつて居るのであります。御覽なさい、禽や獸など病氣にかゝつても藥など用ひずに癒つて居りますし、樹木などは皮など傷んでも何の手當もせずにその傷は癒つて、元のやうに回復するのであります。貴下方も過去に於て、御自分又は御家族の方が腹が痛いとか、手が痛いとかいふ場合に、更に藥など用ひないのにお癒りになつた御經驗がありませう。それは皆自然癒能力の作能があるからであります。

自然療能の解

醫學療法即ち醫術では、藥物を使用して治療の効果を擧げんとするのでありますことは皆さんが御承知の通りであります。しかるに此の藥と申すのは、決して病氣を癒す力はないのであつて、ただ藥の作能は病勢を押へるだけのことであります。藥で病勢を押へたところへ自然癒能力が作能して始めて病氣が癒るのであつて何程病勢を押へても、自然癒能力が其處へ作能せない中は決して病氣は癒らないのであります。年中藥を絶えず用ひて居つて、病勢は募らないが何うも病氣が癒らないといふ所謂慢性患者がありませう。これは藥で病勢は押へて居るが、その患部に自然癒能力が現はれて來ないからであります。何年藥を用ひても自然癒能力が作能しない中は、決して病氣は癒らないのであります。既に說明したところによつて、藥は病氣を癒す力はないもので、病氣の癒るのは自然癒能力の作能によるのであるといふことがお分かりになりましたらう。斯くの如く藥は病氣を癒す力はないのであるから、藥を使用して醫術を行ふ醫師は病氣を癒すものでないことは理の明かなるところであります。かういふお話をすれば、皆さん方の中には、從來藥は病氣を治すもの、醫者は病氣を治すものといふ、錯誤の思想に捕はれ來なすつた方もあるでせうから、さういふ方々は私の今の說明を聞いて異樣の感に打たれなすつたでせう。しかし、私の說明は眞實であるのだから信じなさるより外ないのであります。若御知己に正直な醫者がありましたならば、醫者や藥は病氣を癒すのであらうかと訊ねて御覽なさい。必ずその醫師は、醫者や藥は病氣を癒す力はない。と答へるに相違ないのです。醫者は決して病氣

を癒すのではありません。ですから、醫者の廣告を御覽なさい、毎日の新聞に出て居る醫者の廣告文には、**病氣を治す、**と書いたのは一つもなく、ただその科目だけしか掲げてありません、即ち小兒科、婦人科、性病科、內科、外科、皮膚科、耳鼻咽喉科、眼科といふ風に、唯、その科目だけを表示して居るに過ぎないので、決して病氣を癒すといふことは掲げてないのであります。皆さんがたの中には、これまで氣がつかないで居つた方もありませうが、之からは氣をつけて見て御覽なさい、病氣を癒すといふ廣告は一つもないのであります。萬一、**病氣を癒すといふ廣告を出せば處罰されるのであります。**私の廣告には癒すと書いて置きます。それは眞實に癒すからであります。必ず癒すのであるから力强く癒すといふことが出來るのであります。

藥物療法の迂遠

藥物は病氣を癒すのではなく、唯病氣を抑へるはたらきを爲すに止まつて、病氣の癒るのは自然癒能の作能に由るものであることは前に述べたところであります。即ち醫療法は藥物を與へて病氣を抑へ、そこへ自然癒能力の作能し來るを待つて居り、いくら待つても自然癒能力の作能せない中は病氣が癒らぬといふ。洵に迂遠千萬な治療術であります。實に迂遠至極の治療術たるばかりでなく、もし、誤診の結果、不適の藥物を與へるか、又は藥の分量を過つて與へた場合には、**益々自然癒能力の作能を妨げ、**その結果として所謂餘病なるものを併發するのであります。また藥物中毒などを起すこともあるのです。之を以て見ますれば、醫藥療法は實に迂遠にして又危險なるものであるといはねばなりません。

神速安全の靈學療法

わが靈學療法は、醫術の如く迂遠にして危險なるものとは違ひ、最も敏速にして安全なる治療法であります。加藤式靈學療法は患部に自然癒能力の出て來るのを待たず、術者より發現する自然癒能力を直ちに患部に作能させ、

以て病氣を癒すのであります。自然癒能力を作能させると不健全なる精神は除却され健全なる精神が活動することになる。之を生理上から見れば、血液の汚濁は淨化され、その滯澱は解かれて循環は正調となり、健全細胞の働きは活潑となるのであります。又體質の內分秘作用が旺盛となるのであります。

我が加藤式靈學療法は斯くの如き合理的治療法であるから、醫學療法で一生なほらないといふ難病癌疾でも、數週間又は數ケ月の施術に依つてなほつた實例が幾らも有るのであります。故に醫學療法で必ず一週間でなほる病症であれば、わが靈學療法では普つて一二回の施術で治癒せしむるのであります。

西洋醫學の濫觴

現代、我國に行はれる所謂西洋醫學、これはドイッ系統の醫學であります。この醫學は何時頃日本に傳來したかと申せば、安政年間にプロシヤ國のフェランド博士の著はした醫學書の傳來が現も濫觴であつて、その本の中には斯ういふ意味の事が書いてあります。

「病氣は自然癒能の作動によつてのみなほるべきもので、醫藥は單にこれが補佐を爲すに過ぎず、依つて醫師は自然癒能力の向ふところを良く察知し、是が補佐を爲すべきである。」と

このフェランド博士の所說は、今日の醫學校に於ても教へて居るだらうと思ひますが、自然癒能力とは如何なるものであるかは、所謂る教師も知らないのだから、醫ふ生徒に解らう筈はないのであります。

自然癒能力の本体

然らば、自然癒能力とは抑も何であるかと申せば、**それは活きんとするの力、即ち生命の力をいふのであつて、**

これぞ大靈の力であります。大靈の力さへ充滿して居ればいつも健康であるのです。**健全なる精神の衰へが即ち病氣なのであります。**故に常に靈性を研磨し靈力を充實して居れば、病氣は發生しないのであります。それは病氣の概況たる虛僞精神がはたらかず、至誠の精神のみで生活をするからであります。この說明によつて病氣のことは一層よくお分かりになりましたらう。

生理學では、血液の中には赤血球と白血球とあつて、その白血球は抗菌素で食菌作用を爲すものであるといつて居る。然るに然らば、その白血球こそは正に**靈力の物質形象として顯現したるものであります。**

精神力が病氣を治す

藥は病勢を押へるものであるが、藥にその力なくも、これを使用する者の精神力によつて病氣の應る場合のあることを知らねばなりません。嘗に心身相關の理を說いたところに、太田撒君といふ醫師が唯の水で青年のトラホームを治した。といふことがありましたが、あれは青年が常に信輕して居る太田君の言をそのまゝ信じて、太田君が與へた物は水とは疑はず、トラホームが必ずなほる藥だとの信念を起し、この信念が病氣を治したのであります。

或る青年が不眠症に罹つて幾晩も眠られないので、常に崇敬して居る醫學博士の許に到り不眠症の藥を求めた。博士は早速一包の藥を彼に與へて『この藥は不眠症の名藥で、この藥を用ひて安眠出來ざる者は未だ曾てない。しかし、この藥は服用の時間を誤ると効能がないから、時間を誤らぬやうに注意せねばならぬ。午後の正八時にこれを頓服して直床に這入ると必ず安眠が出來るから、決して時間を誤らぬやうにしなさい。』と、いひ聞かせた。青年は夜の八時の來るのを待ちに待つて、漸く八時となるや直に頓服して寢床に這入ると、これまで幾夜も寢られなかつたのが、翌朝まで安眠が出來たのであります。博士が青年に與へた睡眠藥とは何であつたかと申せば、重曹一包であつたのであります。重曹が睡眠藥でないことは皆さんも御承知でせう。斯く安眠の出來たのは、前の

太田君に於ける青年と同じことで、この患者が博士を信じた結果に外ならぬのであります。

或る新聞にかういふ記事がある。東京帝大病院の眞鍋嘉一郎先生が神經になる話—先頃川越在の農家の婆あさんが治療を受けた、眞鍋さんから處方箋を書いてもらつて押いたゞいて歸つたが十日計りたつて婆あさんまた來て『先生さま、もう護符はありましねえだよ。』……先生妙に思つておふだとはと、きいてみると、先日與へた處方箋をお護符と誤信し、處方箋を煎じては飲み、ちぎつては飲んだとあるにさすがの先生も『アッ』と驚き、再診すると病氣はケロリとなほつてゐた。云々

これは、この婆あさんは大學といふところは大さう偉いところで、そこにゐる先生は神經のやうに偉らい偉い人だと信じて居たので、その先生から下すつた紙は處方箋などゝは知らう筈はなく、無學の婆あさんは文字などわからず、一概に有がたいお護符であると誤信し、このお護符を飲めばたしかに治ると強く信じたその信念のはたらきで、自分で病氣を治したのであります。

彼の仁丹といふ藥の能書は、船、車の醉ひ、酒や煙草をのむ前後、又は氣分の勝れぬ時に用ひればよい。といふやうなことが書いてありますが、皆から。誇大なことは藥の能書見たやうに。と、申しますやうに、その藥は能書程のきゝめがないものとなつて居ります。仁丹の効能書も亦推測に難くないのであります。然るに朝鮮人や南洋人は頭痛がするといへば仁丹を呑み、腹痛や肩の凝りにも仁丹を用ひ、一寸した眼病などや外傷などにも仁丹を用ひると効能があるとのことであるが、日本人にはそのやうな効能はないのであります。同じ物質でありながら、日本人には効能がなく、彼の地の人々にのみなぜ効能があるでせうか。これは、仁丹を彼の地へ賣出した當初に於て、仁丹は萬病に効ありといふやうに誇大なる宣傳をしたのが、朴訥正直なる彼の地の人々の頭へ先入主となつた結果で、仁丹は何病にも効くといふ信念がはたらいてその病氣が應るのであります。

賣藥は無害無効が原則

先年、賣藥稅廢止案が貴族院に提出された時に、議員醫學博士金杉英五郎氏は

『靈藥は無害無効を以て原則としてゐる、去年内務省の發表に依れば、靈藥の爲生命危險に陷つた者六千四百人、死亡者二百三十三人である。』

と、演說をして居ります。靈藥は無効を以て原則として居るとは、皆さん方は定めし意外に感じられたことでせう。昔からの藥の數は萬を以て算へても尚足らない程多くありますが、その中で効能のあるといふのは洵に少數であります。昔から萬病に効ある靈藥だとか、何病に卓効ある神藥だとかといふのが幾つもありますが、ほんとうに萬病に効ある藥であるならば、世の中にはその藥一つでよく、他の藥の必要がないわけでありませんか。

新藥多きは藥効なきを證す

また、何病に靈効ある最新發見藥といふやうなのが後から〳〵と現はれて來ますが、先に出來た藥が眞實に靈効があるならば、後から〳〵と同病に對する新藥が出來なくともよろしいのであつて、後から〳〵と新藥の出來るのは、同病に對する之までの藥の効めがないものであるといふことを物語つて居るわけです。これ位のことは常識でよくわかることなのに、病者は病氣に對して盲目であり、藥についても盲目で闇に迷ふて居るが故に、常識を失ひ無効の藥物に多くの金を濫費して居るのであつて、眞に同情に堪えぬ次第であります。

病氣などは藥に據らずとも、自分が生れながらに持つて居る靈力を作能すれば立派に癒るものであるのに、物質慾に捉はれて居る病者なるものは、偉大なる治癒力たる靈力は肉眼で認め得ざるが故に、自己が所有しながらも其の所有を悟らず、却つて効能なきも肉眼にて認むることの出來る藥なる物質に眩惑し、その生命よりも貴しとするところの金なるものを濫費して居る。何といふ愚にも憐れむべき心情ではありませんか。しかし、これも過去の罪惡の償ひなのであるのです。

人則犯と天則犯

人間の造りました法律を犯した罪人は、刑務所に收容され、外部との交渉を絶たれて自由を拘束され、粗食以て苦役に服せしめられますが、宇宙大靈の聲の御定めになつた大法則を犯せば、病院といふペンキ塗りや、石や瓦で造つた建物の一室内へ閉ぢ込められ、不味い藥なる物を與へられて、命から二番目と大切にして居る金なるものを費消して居る。その苦痛の程度は刑務所に在る罪人と勝るとも劣るところはないぢやありませんか。この點から見ましても病氣なるものは罪惡の發現したものであるといふことが明らかでせう。

現代に病人が多い理由

昨年でありましたか、米國の某醫學博士は『地球に人類發生以來、今日の如く病人の多き時代はない。』と、歎聲を洩らしましたが、何故に現代は、人類創生以來、未だ曾てなき程多數の病人が發生したかの原因については、一言もいうて居らない。それは、醫學などでは到底わからないからである。彼は唯、醫學者の立場から、病人の數の甚だ多い現實だけを眺めたに過ぎないので、何故斯くの如き結果を生ずるに至つたかの原因については全く不明なのであります。

彼の、醫學者等が不明とする病者多數の原因は、我泰山教學に照ぜば直に明瞭になるのであります。泰山教學に於ては、既に發明したる如く、病氣なるものは虛僞精神即ち罪惡の發現であると明斷して居ります。然してまた、公慾及び私慾篇に於て詳說したる如く、地球に人類創生以來、未だ曾て、現代の如く世界人類が虛僞精神の作能を旺盛ならしめたるの時代はないのであります。

依之觀之、現代に於て、未だ曾て例なきほど多數の病人を生じたるの理も、自から明瞭となるわけでありまして、これ等の事實に徹しましても、病氣は罪惡の發現したるものであることが、益々明確になりましたでせう。

醫術は對症療法

醫術は對症療法と申して、先づ診察をして病名を定め、而してこれに適應する物質を與へて治療をするのであつて、その與ふる物質を藥と稱するのであります。かういふ治療法ですから、診察をいたしましても、まだ如何なる病氣か判明せねばその病名をつけるわけにはゆかず、隨つて與ふべき藥なるものもないのであります。藥といふのは何病と定まつた病氣に適應する物質をいふのでありまして、探りの藥といふものはないので、必ず病名が定まつての後に藥なるものがあるので、未だ病名の定まらざる中には藥なるものはないのであります。

しかるに、ここに急病人が出來たといたしまするか、醫師を迎へる。醫師は檢溫器を病人の腋の下に挾むで体溫を計り、聽診器を心臟部や肺部に當てその鼓動や音響を聽き、手首を握つて脈搏の數を算へ、そして首をかしげて居る。病家の者は心配顏をして、

『先生、この病人は何病でありませうか。』と、聞く。醫師は勿体らしい態度をして、

『さあ、体溫は三十八度五分の高熱であり、心臟の鼓動も劇しく、脈搏の數も多い。どうも二三日の經過を見ない中は病名を決定することが出來ません。』と答ふ、

かういふことは、常に世間に多くあるので、定めし皆さん方の中にも斯ういふ事象に出會なすつた方もありませう。二三日經たなければ何病だかわからないので病名を定めることが出來ないといふのであります。

病名なければ藥なし

藥とは疾に述べました通り、病名が決定して、その病症に適應する物質を申すのであります。未だ何病だかわからぬ中には夫れに與ふべきの藥といふものはないのであります。即ち何を與へて良いか悪いか更に判明しないので、つまり與ふべき何物もないのであ

ります。

藥とは、必ず決定したる病症に對しそれに適應する物質をいふので、病症の決定せざる中には藥なるものはなく、さぐりの藥といふものゝあらう筈はないのであります。

しかるに前陳の場合、即ち二三日經たねば何病だかわからぬといふ場合に於ても、醫師はその日から藥なるものを與へる。この場合その與へたるところの物質は、例へ日本藥局法による藥物であつても、未だ病名の決定せざる中に與ふる物質は藥物の資格なきものといはねばならぬ。藥物の資格なき物質を與へて藥價なるものを徵收する。これ明らかに不正の金錢を貪るものといふべきであります。病家に於ては、斯くの如き不正漢たることを看破するの明なく、しかもそれを尊敬して、命から二番目否生命よりも尊重しとして居る金錢を捧げて、叩頭拜謝してゐる。私は曾て宇宙間には不可思議なる現象なしと申して置きましたが、もし、宇宙間に不可思議なる現象ありとしましたならば、右の場合に於ける醫師と患家の行動こそ唯一の不可思議なる現象と申すべきであります。呵々

松下博士の奇問

先年流行性感冒の熾なりし時、折しも帝國議會開會中であつたが、議會に於て衆議院議員醫學博士松下禎二氏は政府委員にこのやうな質問をした。

『政府で主管する傳染病研究所で製造販賣する流行性感冒に對する豫防注射液なるものは一体何病に効くのか。』との奇問を發し、續いて曰く、

『流行性感冒については、世界の學界に於て未だその病原菌が發見されないのである。未だ病原が判らないのにそれを治す藥のあらう筈がない、況んやそれを豫防するに於てをや。』と、詰問したところ、政府委員は一言の辯明も出來なかつ

たのであります。國家が辯明も出來ざるやうな怪しげなる藥液を製造販賣して不正の金錢を貪る如きの現狀は、これ正に闇の世と申すべきであります。

コレラの豫防注射

先年、伊勢四日市にコレラ病の發生したことがありました。その時わが國に於て傳染病學の泰斗といはれる某醫學博士が同地へ觀察に往き、歸京後發表して曰く、今回伊勢四日市に發生したるコレラ病は頗る猛烈を極め蔓延の兆著るし、今にして速かに豫防方法を講ぜざれば遂に全國に蔓延せん云々。と、内務省は博士の發表に驚かされ、急ぎ技師を同地に派遣して調査せしめたところ、罹病者が大分多いので、内務省は各府縣に令を下し、コレラ病の豫防注射を施行せしめた。或村落などでは村費で注射費用を負擔したところもあつたが、大概は個人々々が注射一本に付き三十錢四十錢づつ出して豫防注射を行つてもらつたのであります。しかるに此の豫防液の注射が果してコレラ病豫防の爲に効能があつたか、なかつたか其の眞相の未だ辯明せざる中に、この豫防注射をやつてもらつた爲に、大騒を發した、大病に罹つたといふ者が、彼方にも此方にも澤山現はれた。しかし如何に大病にかゝつたといつても名もなき町人や百姓が如何に叫んでも世人は餘り取り上げて呉れなかつたのであります。

國士の悲壯な叫び

しかるに、明治大正年代に於ける奇傑とし、また國士としての鍋島藩人河野廣中氏を知る程の世人は、同藩人にして明治初年佳人の奇遇てふ小說を書いて天下に文名を聽せ、その後長らく政界に在つて國家に盡くしたる名士として知悉して居るところの柴四郎氏が、去る大正十年一月、東京朝日新聞記者に物語つて曰く、

『俺は、年とつたせいか文明の慰澤に浴することが出來ないと見えて、此間虎列拉病の豫防注射なるものをやつてもらつたところ、大病に罹り殆ど死ぬとこだつたが、昨今やつと良い方に向つて來た。』と、

柴氏の言は何たる悲壯にしてまた皮肉ではありませんか。凡そ文明の慰澤には老幼を問はず等しく浴すべきものであります、然るに柴氏は「俺は年老いたせいか、文明の慰澤に浴することが出來ないと見えて。」といふた。その言葉の裏に籠つてゐる意味は、「文明の慰物だなんていうて、コレラ病の豫防注射などをやるが、却つて人体に苦痛を與へるのは文明ではなく、野蠻の行爲である。」といふにあるのです。名もなき者の叫びと嘆ひ、國家の名士の吐いた言葉は世に甚大の反響を與へます。柴四郎氏の言は、コレラ病豫防注射液の無効有害なることを攻擊したるものであります。然らば、この注射液を製造販賣するところの者は、その注射液に對する責任があります。故に、もし、注射液が有効なものであるならば、柴四郎氏の攻擊に對し辯明すべきは當然であります。然るに私の寡聞なるの故か、その後數年を經たる今日、尚その實責者より一言の辯明ありしことを耳にしないのであります。然らば、この豫防注射液なるものは何處で製造し販賣したのであらうか。それは疑に四日市へ視察に往つた某醫學博士の主宰する研究所に於て製造し且販賣したのであります。これに依つて觀ますれば、萬人を苦しめ、萬人の懷より金を吐き出させ、誰が良いことをしたのであつたか。即ち某博士及びその一味の者のポッケットが忽ち膨れたといふ結果を生じたのであります。嗚呼、何といふお化けの世の中ではありませんか。

アンチピリンが高價藥

門生中の醫師高井氏が、今から十年程前の夏、會津の鶴鳴温泉に來て居られたときのこと、附近某村の患家から迎へられ、往つて診ると患者は腸窒扶斯であつた。そこで高井氏は、

『これ迄何處の先生に診てもらつて居られましたか。』と、問はれたところ、家人は、

『上三ノ宮の先生を上げて居りました。（上げて、とは方言で、來て貰つて居たといふ意味、この上三ノ宮といふは、この村から一里半ばかり隔つたところの小さな宿場町で、その醫師に來て貰ふと、車賃酒肴料その他で一回五圓はかゝつたさうである。當時

は今日と違ひ物價は安かつた。當時の五圓は今の十五圓位には當つて居りませう。その醫師を毎日上げて居つたとの事であるが、けれども、なか〳〵熱が冷めませんので、何とかしてこの熱を冷すやうなお藥はありませんでせうかとお尋ねしたところ。先生は、それはある。獨乙で最新發見に係る解熱藥なればこの熱はたしかに下がる。併しその藥は非常の高價藥である。と、かうおつしやいますので、お値段なんか何程高くとも、この病人が一日も早く治ることなら、是非そのお藥を戴きたい。と申して先生からその高價藥を戴きました。』ここまで聞いた高井氏は

『そのお藥で熱は下りましたか。』

家人『イ、エ。そのお藥を頂きましたが、やつぱり熱は下りませんで困つて居りましたところ、熱海溫泉へ東京の先生が來て居らるゝといふことを人より聞きましたので、一昨日から毎日お願ひに參り、やつと三日目の今日、あなた樣に來て頂くことが出來たわけです。何うか先生、家の病人をお助け下さい。』

高井氏『それなら、上三ノ宮の先生が下すつた高價な解熱藥といふのは、それは散藥でしたか水藥でしたか。』

家人『粉のお藥でありました。』

高井氏『ぢや、その包紙があつたらお見せ下さらむか。』

家人『これであります。』と、病人の枕邊にあつた包紙を高井氏に渡した。高井氏これをひろげて見ると、中に儘な白き粉末が殘つて居つたので、無名指へつけてこれを舌へ上げて見ると、どうでせう。その當時藥店で一服五錢か十錢で賣つて居つたアンチピリン散であつたとのことであります。何といふ思いことをするではありませんか。

有金を捲き上げて突つ放す

先年私が越後へ出張したときのことであります。一農家の寡婦が夫に死なれて後は、幼い遺兒を育て乍ら、粒々辛苦數年か間かつ

て四百圓の貯蓄をした。長い間の無理働きは遂に健康を害し、胃腸と子宮を惡くした。そこで長岡市の某病院へ往つて診察して貰ふと、一ヶ月入院すれば治癒者になるといはるるので入院して治療を受くることになつた。ところが一ヶ月は過ぎたが少しも良くならない。病院ではもう一ヶ月居れば癒るといふので、また一ヶ月入院して居つたが、やつぱり良くならない。さうすると病院では尚一ヶ月入院して居れば必ず良くなるといふので、癒りたいばつかりに續いて入院して居つたが、病氣は少しも治らない中に、今度は金の方が盡きて來た。さうすると病院では、お前の病氣は溫泉へ往くと治るから溫泉へ行つた方がいゝ。と、体よく追放されて了つた。長年の辛苦を積むで貯め得た金はすつかり遣はせられ、病氣は少しも治らず、落胆して家へ歸りその後數ヶ月の間、働きもならず唯ブラ〳〵と過しき日を送つて居たのであります。

ところが、私が滯在して居つた三條町にその寡婦の兄が居り、この兄なる人は長年の脊骨神經痛で醫藥は勿論、いろ〳〵の治療法を試みたが、一向効めがなく、働きもろく〳〵出來ずに居たところ、私の治療を受くること一週間でスッカリ全治し、ピン〳〵として毎日愉快に仕事をするやうになつた。寡婦はこの兄に薦められて私の施術を受けに來た。そして一週間目には山へ杉苗木を植たりして働くやうになり、二週間の施術によつて全く健康体となつて喜悅の中に、子供とともに暮すことが出來るやうになつたのは、偏に率直ではあるが、長岡の某病院の醫員等の殘忍無慈悲の行爲は法律は縱しこれを問はずとも、宇宙大法則は決してこれを容さないのであります。

驚くべき鰻會の眞相

私が數年前、關東の或市に滯錫中聞知したる所に依れば。その市の醫師會員は毎月一回、鰻屋に會合して鰻會といふを開き、共飲會食して居り、その目的は觀賞を計るにある。というて居るさうであるが。それは、實に世間を誤魔化す口實であつて、その會合の眞目的は、過去の一ヶ月に於て各自取扱つた患者中、藥價支拂ひの滯き者を記入したる手帳を持寄つて、相互にそれを寫し合ふと

いふのであつて、爾後さういふ患家からの招ひがあつても留守を遣つて往かないといふのであります。何と呆れた仁術家連ではありませんか。

博士の凌辱……皮肉な若返り法

先年、横濱の醫學博士が、來患者中の某實業家の娘で、花ならば蕾の處女を麻睡劑を用して、數回に亘り凌辱したることが發覺し告訴されて入獄するに至つた事件は皆さん方が未だ御記憶にありませう。又醫學博士[illegible]某が九州醫科大學の教授在職中、動物の睾丸精を注射するといふ、スタイナッハの發見と稱する若返り法なるものを施行し、その依頼するところの色慾老人等から、注射料一千圓づつを捲き上げて居つたことが問題となり、大學教授の職を去らざるを得ざるに至つた。然るに彼が退職後一二年すると、同大學の副手である大久保醫學士が、**若返り法の無効**との論文を同大學に提出して醫學博士に推薦されたが、何たる皮肉なことではありませんか。いま、この事を報道した新聞記事を左に掲げます。

「若返り法が無効と喝破して醫學博士に推薦された、九大の大久保一雄さん」といふ題下に

【福岡發】若返り法で有名な九大精神科の[illegible]保三郎博士が去つた後の同大學から[illegible]博士のやつてゐたスタイナッハの若返り法が永久に効果がないといふ論文を草して醫學博士に推薦された副手がある、同大學の皮膚科教室で研究中の大久保一雄氏がその人で同氏は[illegible]博士が大正十一年春京大醫科で若返り法を發表した當時から研究して居たのである、元來そのスタイナッハの若返り法は輸精管の結紮を切斷して睾丸中の精虫との聯絡を絶ち不自然的に新陳代謝の更新を圖るといふ方法なのであるが夫れについて組織的に研究されたものはなくスタイナッハの原本を見ても的確なる學說を載せてゐないそこで大久保氏がその原理を確めるため百數頭の兎について研究した結果輸精管を結紮しても間細胞が增殖するといふ結果が得られないまた輸精管を結紮した場合組織的に新陳代謝し更に血液ガスの變化が睾丸にどんな變化を起すか研究した結果、一氣呵成的の不自然な新陳代謝の更新は見えるがそれは假

定的のもので實際に於ては同細胞が增殖には直接關係のないことが判明したのである。云々

また、ビタミンAは睾丸結紮に偉効ありとは、長き間醫學界に於て確信し、唱道し來つたので、一般人もしかく信じ、ビタミンAは睾丸結紮患者に盛んに使用されたのであつたが、中原博士によつて、ビタミンAは大した効力あるものでないと、醫學士會で發表されたといふ左の如き新聞記事がある。

震災直後の醫學士會が十七日午後五時よりステーションホテルに於て開かれた出席者は本田、長與、佐野、二木博士等凡そ四十三名先づ本田博士を座長に推し會務報告及委員會の經過報告等あつたが、委員會經過報告中特に觀聽を惹いたのは中原博士の報告「ビタミンAに關する調査報告」で夫れによるとビタミンAは之を睾丸結紮に對し非常な特効ある如く信ぜられてゐたがその効力たるや大したものでないといふ事が證據立てられた云々

また、脚氣の原因は白米食にありとは、數十年の間、醫學界に於て唱道し且確信して、それに基く手當法をやつて來たことは、誰人も知るところであります。しかるに今回松村博士の研究によつて、脚氣病に對する醫學界のこの信念は、根本から覆へされてしまつたとは、左の記事によつて發表されたのであります。

「脚氣は傳染病菌、白米食に原因せぬ、と松村博士が發表」（昭和四年十一月九日東京日日紙）

【千葉發】千葉醫學會第七回總會は七日午前八時から千葉醫大新講堂で開催、出席者約八百名、會長改選の結果松本前學長の後任として高橋學長が就任し議事を終り會員七十餘名の學術發表演說會があつた、中でも目立つたのは脚氣病の權威松村博士の「白米食と脚氣の傳染との關係」と題し昨年來南洋、南米、インド、南支那の脚氣病狀態を視察研究をとげた結果を發表し脚氣病は白米食の缺陷にあらず一種の傳染病菌なりと「松村氏脚氣の菌」の新學說を確證したもので學界に大きな反響を與へる發表である云々

さきのスタイナッハの若返り法といひ、睾丸結紮に對するビタミンAといひ、また この脚氣に對する白米食といひ、ともに長き間醫學者等の確信し來つたものであつたが、斯くの如く、その確信の覆へされるを見れば、從前の確信なるものは、**永劫不變の信**

ではなく、一時的の信であつて、不徹底なる信であることが明瞭である。これに依つて見るも醫術は不確信の上に立つてをるものであるといはねばなりません。

また、數十年來科學者の金科玉條と信じ來つた、ニュートンの絶對性原理なるものが、先年アイスタインの相對性原理のために根本から跡形もなく覆へされたことは誰人も知るところであります。これ等のことを思へば、物質科學なるものは、迷信の道を辿つて居るものであるといふことは明白で、少しも論議の餘地がないのであります。

眞實の若返り法

スタイナッハの若返り法などは私は知りませんが、眞實の若返り法は、泰山教學の精能力增進法がそれであります。諸能力增進法を行ふと、いつも元氣旺盛で心身共に若々しく生存が出來るので、これぞ眞實の若返り法であります。

さて醫師の非行を擧げれば迚も際限がありませんからこの位にいたして置きますが、私は決して醫師を好んで攻擊するのではないのであります。

醫は仁術なり

醫術は昔より仁術と申して居ります。仁術とは慈悲心を以て行ふ仕事といふ意味であつて、弱き者を助け憫れなる者を救ふことを本分とするのであります。故に營利といふやうな不純なる思想は仁術にはないのであります。今日も醫家に於ては、醫業は仁術であつて決して營利を目的として居るものではないと信じて居りますので、他の職業には營業稅を課して居りますが、醫業には營業稅は課してないのであります。また、仁術を施すが故に醫師は昔から世人の尊敬を受けて居るわけであります。

しかるに、現時わが國の醫術家を見まするに、その多くは營利を基としてその業を行つて居るといふことは、今更私が申上げるまでもなく皆さん方がよく御承知のことであらうと存じます。彼等は仁術を忘れ營利の上に立つて居るが故に、世に醫學療法以外の治療法が出現すると、その如何なる治療術なるかを研究もせずに、直に酷烈敵と見做しこれを駆逐し、悪罵し讒誣し、到りに妨害を加へんとするのであります。その心事の狹小陋劣眞に慨然に堪えません。醫術以外の治療術が世に現はれたときには進んで之を研究し、醫術と比較して見ればよいのであります。

醫術の不完全は醫家自らこれを知る

醫術の不完全であることは、他人がこれを言はずとも、實施者たる醫家が自らよくこれを知つて居るのであります。しかも、我靈學療法は世界未曾有の偉大なる治療法であることは、從前の實績が明らかに物語つて居りまして、醫術では到底治癒し得ざる難病癌疾が快癒さるゝばかりでなく、その治療方法の安全にして且容易に、また至便至利の治療法であります。斯くの如き、未だ治療界に類例なき偉大なる治療學術の出現したることを知つたならば、醫師は直に入門して是が講授を受け、泰山教學及びその法術を体得し、以て醫術で治癒の見込みなき難病癌疾者を救療し、回天の喜悅を得せしむるといふことに努力せねばならぬ。これが仁術の本分を完うする所以であります、私が醫術家の非行を攻擊するのは、實は彼等を眞愛するの結果であつて、彼等が偏狹なる心境内に蟄居し、仁術の本分を沒却し、物慾その他の邪慾の捕虜となり、常に不安恐怖の生活を爲し居るの現狀を打開し、その闇黑の迷妄より救出し、眞に仁術家たる光明に浴せしむることが私の希望なのであります。

醫の目的は醫なきにあり

先年、田中内閣の司法大臣たりし原嘉道氏は、多年、辯護士として吾國法曹界に重きを成し、名聲嘖々たる人であるが、往年、或

事件の解決に起つた時に、裁判長に對つて斯ういふことを謂はれた。

「凡そ、裁判所構成の目的は、裁判事件の綱紀を糺む如きあらば、正にこれ裁判所構成の精神に反するものである。」と、洵に至言といふべきであります。

私が大正九年の正月、伊勢の桑名に參つた時に、桑名縣の特合室で机上にあつた四日市新聞の新年號を手にした、記事の中に四日市警察署長の談が載せてあつたが、その談話の中に「凡そ警察署の目的は、警察事犯の絶無にあり、若それ警察官吏にして、警察事犯の多きを望む如きあらば、それは警察の使命を無視し警察の目的に反する者である。」云々と、わしはこれを讀んで、警察本來の生命を理解した感心な署長であるゝ事ひました。かういふ立派なる人達斗りが警察官吏であつたならば、我國民はほんたうに幸福であるのです。

泰山教の目的は泰山教の必要なきにあり

泰山教の目的は、この世に煩惱者、病苦者をなからしめ、靈光文明を建設するにあることは皆さん方が御理解になつたところであります。靈光文明の建設が完成すれば、世には惱む者も悩える者もまた病氣にかゝる者もなく、一切衆生は光明歡樂の樂地に安住するにいたり、即ち救はるべき者がなくなる。この救はるべき者の絶無が、泰山教の使命であり、究極の目的であります。語を換へて申せば、泰山教の眞目的は、泰山教の存在の要なきにあるのです。

醫師本來の使命は、醫師の存在の必要がなくなるといふにあらねばならぬ。即ち醫の目的は醫なきにあるのです。醫といふ藝術は常に疾病を醫すといふ消極的作爲斗りが能ではなく、積極的に健康の保持增進を圖り以て疾病なからしむるにある。語を換へて申せば、病人の一人も居らなくなるのが醫術の目的であります。若それ、病人の多きを望む醫家ありとすれば、それは醫本來の使命を沒却したる非醫と謂はねばなりません。強行性感冒でも發生したる時節に、或者が醫師に「先生この頃はお忙しいですか。」と問ふた

場合「いやどうも此頃は馬鹿に忙しくつてね。」と嬉然するやうな、內心患者が多くて收入が多大なるを喜ぶ如き醫師ありとせば、その醫師は醫の本分を辨へず、醫の仁術たるを無視し、利慾にのみ生きる非醫者であつて、醫そのものゝ敵といふべきであります。他の苦を自己の苦とし、その苦を除いて眞樂を得せしむるが仁といふのであつて、眞樂を得せしめずして、衆苦の多く發生するを悅ぶが如きは、不仁も亦極まりといふべきであります。

憎いとて叩くのでなし雪の竹

この句は、竹を叩くのは、憎いがためにたゝくのでなく、雪壓のためにその生命を絶たれんとするをあはれみ、これを救はんが爲の所作で、慈悲の拳、愛の笞であるとの意味であります。

私が、醫者に對つての苦言は、この雪の竹と同じく、利慾に捉はれて、醫本來の生命を失はんとするの惑を憫れみ、その生命の壓壓を除き、仁術家たる活生命を發現せしめんがために外ならないのであります。

泰山教靈學療法と醫術及び其他の治療法との比較

既に說明したるところによつて、現代醫術と、わが靈學療法とには甚大なる差異あることがお分かりになりましたでせう。尙お話し申した外に一二異なる點を擧げますれば、醫學療法では、或患者に對し『外科手術すれば治るが、今は身体が衰弱して居るから、身体を健康にしてからでなくては手術は出來ない。』といふことがあります。ところがこの患者はその病氣のために身体が衰弱して居るのだからその病氣が治らぬ中は、身体も健康にはならないのです。身体が健康になつた時は、その病氣が癒つた時なのです。然らば、前述の如く、身体が健康になつた上でなければ手術が出來ない。といふは、「その病氣を治すことが出來ない。」といふと同じ意味となります。

わが靈學療法では、斯くの如き患者に對しては、即時治療施術を開始し、一日も早くその病根を治して健康に復せしむるのであり

ます。

醫術療法では『患者が幼年であるから手術が出來ない、モウ四五年經たなければ手術して治すことが出來ぬ。』といふことがあります。何といふ迂遠な療法ではあるまいか。如何なる病氣でも瞬時も早く全治せしめ患者をして速かに病苦より救出し、光明の幸福に浴せしむるのが醫術を行ふ醫家の本分であるのに、それを爲し得ずして、患者を四五年苦しむるといふことは、その本分に反するものといはねばなりません。斯くの如き患者に對しては、わが靈學療法は、前項の患者と同じく即時治療を開始し速かに健康體にならしむるのであります。

現代醫術では、所謂婦人病に就ては、局部洗滌又は切開手術、抉剔等盛んに行つて居るが、これは倫理を無視したるものと云はねばならぬ。一体、人体に傷をつけるといふことは、殘忍なる行爲であつて、殊に婦人の局部屢開洗滌等は節操を無視したる行爲であります。しかし乍ら、現代の醫術に於て、斯くの如き病患者には洗滌又は切開手術等の外、施す術がないのだから、實に不完全の治療術といはねばなりません。

何疾患に對しても切開手術といふことはよくないのであります。假令、切開手術のためにその疾患は癒されても、切開手術といふ不自然の所作のために、邪氣邪熱といふものが出來て、これが終生禍ひを爲すのであります。そして必ず精神にも惡影響を及ぼし、偏固、遲鈍、その他性格に變化を生ぜしむるものであります。

わが靈學療法に於ては、如何なる疾患に對しても、手術切開等を爲さず、大靈力を以て心地よく治癒せしむると共に、その性格を陶冶し善良に導くのであります。

なほ、現代醫術とわが靈學療法及精神療法とわが靈學療法、電氣療法とわが靈學療法との差異を指摘し、豪山數靈學療法が如何に優秀完全にして、眞に理想的治療法であるかといふことについては、第十三講、第十四講の治療總論觀授の時に於て詳しく說明することにいたします。

第十講　衞生學篇

衛生の意義

凡そ、衛生とは健康を保持し且健康を增進するところのものであります。故に衛生學の目的は、それを實現せしむるにあります。しかして、衛生思想の發達したる國が文明國であり、衛生思想の低い國が野蠻國であるとは一般の人々がいうて居るところであります。わが國は世界文明國の一つであり、隨つてわが國民の衛生思想は逐年發達し、個人衛生に家庭衛生に公衆衛生に、學校工場の衛生にと、一にも二にも衛生〳〵を叫び、國家はまた、巨額の費用を年々支出して、盛々國民の衛生思想の涵養に務め、また諸種の衛生施設を爲しつゝあることは皆さん方の御承知の通りであります。斯くの如く我國民の衛生思想が發達したからには、我國民の健康は增進すべき筈でありますが、實際の狀態を見ますれば之に反し、逐年不健康に陷りつゝあるのであります。

衛生思想の發達は國民の健康を害す

關東大震災前、境野東京憲兵隊長は、毎年徵兵檢査の直後に於て獻策を洩らして曰く、我國壯丁の体格は逐年劣惡になりつゝあり國家前途の憂、寒心に堪へず。と、また、私が先年水戸市へ滯在中、丁度徵兵檢査がありましたが、その時司令官は、茨城縣下の壯丁の体格は年々低下して行く、これは洵に困つたことであると慨歎して居つたのです。國民の衛生思想が益々發達するならば、國民の健康狀態は益々佳良であらねばならぬのに、なぜ斯くの如く、國民の健康狀態は反對に劣惡になつて往くであらうか。この疑問を

解くには、現代の衛生學は我國民に何を敎へつゝあるかを究むるにあります。現代の衛生學は吾人に何を敎へるのであるかといへば、**徵菌を恐れよ。**と說くのであります。猛毒蛇を恐れよと說くならば、まだしもだが、肉眼にてその存在を認むることが出來ず、幾百倍の顯微鏡下に依らざれば認識することの出來ぬほどの最微なるものを怖れよ恐れよと敎ふるのが現代の衛生學であります。即ち衛生學は我が國民に對し、最微物に對する恐怖の觀念を惹起せしむるを以て目的として居るのであります。衛生展覽會であるとか衛生映畫會であるとかを觀るに、微菌の模型などを大きく作つたのを陳列したり、または食事の有樣を繪畫に現はして、蠅はバイキンの媒介をして危險であるとの說明を附したり、何れを見てもバイキンに對する恐怖心を起させぬものは一つもない。

バイキン恐怖の觀念

私が、先年新潟市に滯留中、新潟の某新聞に斯ういふことが書いてあつた。

『近時我國民が衛生思想の發達しつゝあるは、寔に國家のために喜ばしいことである。しかし、まだ日常氣づかずに危險を犯して居ることがある。たとへば、紙幣や貨幣は常に不潔の手を轉々して居つてバイキンが多く附着してゐる。今や入梅期に差し迫つて居るが、入梅期に入ればその附着してゐるバイキンの數が益々增殖する。それを氣付かずに紙幣や貨幣をいぢつた手を消毒もしないで、その手で菓子や果物などを食べてゐるが、それはバイキンを喰ひつゝあるものである。また、食後に於て箸は湯で洗ふ習慣は驚氣消毒をするのであるから至極よろしいが、その箸を入れる箸籠は空氣の流通がわるいので、中にはバイキンが發生して居る。入梅期に入れば益々バイキンが增殖する、それに氣づかずにバイキンの澤山居る箸籠へ入れた箸を次ぎの食事の時に消毒もせずに、箸籠の中のバイキンが澤山附着して居る箸を以て食事をしてゐる。まるでバイキンを喰ふて居るのである。また便所の手洗ひ筒の糊には、入梅期になるとバイキンが澤山發生する、それに氣づかず切手や封筒の糊をなめて貼つて居るが、これ等はバイキンを口中に入れつゝあるものでまことに危險千萬なことである。』と、

私は、この記事を讀んで嘆賞すること久しきものがあつた、世人はこの記事を讀んで如何なる感じを起すであらうか。定めし、これまでは成程かういふことを氣づかずに危險をやつて居つた、これからは氣をつけなければならぬと。これまでさういふことをやつてゐて、少しも健康に障りを感じなかつた人々に對し、危險の感を懷かしめ、バイキンに對する新たなる恐怖心を惹起せしむる結果を生ずるであらう。あゝ實に偉なることを書いて社會を害するも甚だしい。と、私は思ふたのであります。これを以て見るも今日の衛生思想と申すのは、バイキンを恐るゝ心をいふのであつて、衛生學者なるものは、人間にバイキンを恐れよ〳〵と敎へて居るのであります。

私は、今日の衛生學者等に、汝等よ、夏、農家へいつて農民の食事の有樣を見よ、厩から飛び來つた、多くの金蠅が、食物の上にとまり居るを農民は何等意にも介せず、それを拂へつゝ平然として飲食しつゝあるが、汝等がその有樣を見ば、後べに驚着どころか正に卒倒するに相違あるまい。しかし、汝等と、それ等農民との健康狀態を比較すると、農民の方が幾倍の優秀である。と聞かしてやりたいと思ふのであります。

福島將軍の衛生觀

曾て、福島大將が滿蒙を視察して歸朝後、各地に於て滿蒙事情の講演をやられてあつたが、その講演中にかういふことを言はれてあつた。

『蒙古人は實に不潔の民でありまして、人糞や馬糞の中へゴロ〳〵と寢て居るのであります。日本人から見れば實にお話にならぬ不潔の生活を爲して居り、衛生思想などは少しもない野蠻人であります。併し乍ら、その健康狀態を見まするとと頗る優秀で日本人は遠く彼等に及ばないのであります。』と、

福島大將の話に見ましても、衛生思想の發達したる者は不健康であり、衛生思想など少しもない者の方が健康であるといふことが

明らかであります。

人生は黴菌と密接不離

現代の衛生學の教ふるバイキン…現代人に恐怖の觀念を生ぜしむる根元たるバイキン…この黴菌と稱する微物は、吾人の日常生活と不離の關係にあるのです。あらゆる食物にも、水にも空氣にも、また日常使用する器物にも、身邊にある諸道具にも、書籍にも、衣服にも、親や子の身体にも、夫や妻の身体にも、友人の身体にも、主人や雇人の身体にも、教師や生徒の身体にも、商人の身體にも其の商品にも、客の身体にも、障子にも襖にも壁にも窓にも、住宅物置きそのものにも、神社にも佛閣にも、その他人間生活と交渉ある總てのものには、所謂バイキンなるものは附着し、飛散しつゝあるのであります。もし、否らずといふものあらば、以上列擧したる總ての物に就て檢鏡して見ればよい。必ず多くのバイキンを認識することが出來るのであります。

斯くの如く、バイキンと人間の實際生活とは密接不離の關係にある。故に彼等衛生學者の主唱する如く、バイキンは恐るべきものとなし、バイキンに遠ざかるの生活を爲さんとせば、住宅に在るを避け、一切の物を使用することをなさず、何物をも食せず、水を飲まず、空氣をも吸ふことを避けなければならぬことになります。斯くの如くんば、人間の生活を如何にせんやです。正にこれ人間生活を不可能ならしむるもので、人間生活の脅威これより甚だしきはないのであります。實に今日の衛生學は人間にその生活を不可能ならしめんと務めて居るのであります。

最大危險思想

人間生活中に於て、不幸と稱するものゝ中で、その生活を不可能ならしめる……即ち生活機能の停止……これを思想上から見れば人間生活の否定これ位、不幸の最大なるものはありますまい。現時の人々は共産主義、社會主義、無政府主義てふ思想は、頗

る危險なりとして怖れて居る。しかし、これ等の思想は何れも人間生活を否定して居るのでなく、唯、過去よりの人間生活の樣式を變改せんとするに過ぎないのであります。

然るに現代の衛生學は人間生活を否定してその生活を停止せしめんとするのであります。皆さん方、世に危險思想ありとしても、これ以上の危險思想がありませうか。實に危險思想の最大なるものといはねばなりません。

如何なる學問でも思想でも、人間生活に眞の幸福を齎すところのものであれば、多大の犧牲や費用を投じても、それが存續に努力せねばならぬが、之に反し、人間生活に最大不幸を招來するの學問や思想は、一秒間と雖もその存在を認容するわけにはゆかず、つとめてこれが撲滅に奮勵せなければならないのであります。

この眞理は、私が殊更に申さずとも白痴であらざる限り誰人も等しく首肯するところでありませう。然るに所謂文明國と稱する各國家は、この最大危險思想を撲滅せんとはせず、努めてこれが助長に國帑を費消しつゝある。冗費の甚だしきこれ以上のものはあるまじく、また、これ以上の暗愚はありますまい。

肉眼もて認識し得ざる最微物に對して、恐怖の觀念を湧起せしむるの危險思想を根絶せしめ、進んで宇宙一切現象を支配するの、最大膽力、雄大なるの思想を國民に涵養せしむるに國帑を惜しまざる國家こそ、最も賢明なる國家であつて、また眞實なる文明國と申すべきであります。

似非衛生學

恐怖は惡魔であつて吾人の圓滿生活を破壞するところのものであるとは皆さん方が既に徹底的に御理解なされたるところであります。しかして、現代の衛生學は前に申述べました如く、人間に恐怖を惹起せしむるを以て本能として居るのであります。恐怖は一身を破り國家を亡ぼすところのものであります。ですから私は、現代の衛生學を稱して 亡國學 と申して居

るのであります。

然らば、人類に衛生思想の必要なきやといへば、決してさうではない。衛生思想は實に必要なものであり、衛生學は何よりも大切な學問であります。既に述べたる通り、衛生思想は人類の健康を保持し且これを、增進するの概念であり、衛生學はその實現を數ゆるの學問であります。人生の第一要義は健康を保持するにありますから、それを實現せしむるところの力ある衛生學は、人間生活に必須の學問であることは申すまでもないことであります。

然し乍ら、人間の健康を破壞するを以て目的とする現代の衛生學の如きは、之正に似非衛生學であつて、人間生活に最も有害なるものであります。斯くの如き、人間生活に有害なる結果をもたらす似非衛生學は、一日も速かに人類社會より弔り去らねばならぬのであります。然るに、わが國に於ては、多大の國帑を費してまでも、斯くの如き、似非衛生學の助長に努力しつゝあるのであります。洵に浩嘆に堪へない次第で、われ等は起つて、一日も早くその妄を打破し國民に眞の健康を得せしむることに努力せなければならぬのであります。

眞實の衛生學

然らば、現代に於て眞に人類の健康を保持し且健康を增進するところの、眞實なる衛生學がないかといへば、それはあります。世界に唯一つあるのであります。然してその眞實なる衛生學はこの泰山教學が即ちそれであります。今日まで講養し來つたところに依つても既に御理解になりましたる如く、わが泰山教學は、人間の健康生活を破壞するあらゆる惡魔を驅滅し、人類をして純眞圓滿幸福の生活を顯現せしむるの力を有するのであります。實に惡魔の發生せざる心境に安住するによつて、始て眞の健康を得ることが出來るのであります。泰山教は人類をして惡魔なきの心境に泰然自若の生活を爲さしむるのであります。故に泰山教學こそは唯一絶對の純眞なる衛生學と申すべきであります。

序で乍ら申述べて置きます。それは外でもありません。今の人々は所謂似非衛生思想に捉はれて、一にも二にも肉眼にて顯微し得ざる最微物質たる微菌なるものを恐れ、常に恟々として不安の生存をつづけて居りますので、感冒でも流行しますると、その微菌を防禦がんが爲にマスクなるものを被けける。しかし、數百倍の顯微鏡下に依らざれば顯微することが出來ぬほどの最微なる物質は、呼吸を通じ得るマスクの間隙よりは自由に出入りするのであります。それを悟らずしてマスクを使用して居るのは洵に愚なことである。しかも、そのマスクとは外語であつて、日本語でいへば口輪と申して、物をかませないために口へ箝めるものでありまして、口籠（くちかご）（くつこ）などとも申すのであります。

このくつこと申すものは、古來、我國の歷史を調べて見ましても、また口碑にも未だ人間が之を箝めたと謂ふ例はないのであります。昔から我國でくつこを箝めたものは、牛や馬や狂犬より外にないやうであります。

心行一如

豫てお話申しました通り、行ひなるものは必ず心の現はれでありまして、心なきの行ひといふのはあるべき筈がないのであつて、吾人の一擧手一投足は皆それ精神の顯現に外ならぬのであります。

然らば、現時マスクを用ゆる人々の心性は正に牛や馬や狂犬と同樣なることを表明して居るものであります。而もマスクを用ゆる者の多い狀態を見れば、確に現代人の多くは、形相は未だ人間であつても、その心性は既に已に牛馬狂犬等と同じ畜生界に墮落したものであつて、洵に慨歎すべく、また眞に憐れむべきものであります。

我等はこの憐れむべき人面獸心の者どもを濟度し、其獸性を顯現せしめ以て眞實の人間界に生存せしめねばならぬのであります。

第十一講　靈　篇

靈の本質

靈といふ字の義はマコト也、ココロ也といふのであります。これは私が勝手に作つたのではなく、詳しい字典を御覽になれば、いづれも此通りの字義を書いてあります。

乃ち靈とは誠の心をいふのであつて、誠の心とは至誠の精神のことであります。

無神主義者の矛盾撞着

物質主義者等は、靈の實在を否定して居るが、それは彼等に靈即ち誠の心の持合はせがないといふことを自ら肯定し表白して居るのであります。また、凡夫等は靈などはあるものではない、靈の實在を眞ずるのは迷信であり、靈など口にするのは恥辱であると云うて居り乍ら、夫れ自身は人は萬物の靈長で御座ると申してをる。自らは靈の長樣であると信じて居りながら、又、自らその靈を否定する。何といふ矛盾撞着も甚だしといはざるを得ぬ。靈長は人であるといふならば、靈の實在を否定するところの者は、人に非ずといふことになる。實に彼等は自己の人格を否認し沒却してをる。人でなければ抑も何者か、獸類で、でもあるのか？

また、世には無神主義者がある、神がないといふことは、即ち自己に精神がないといふことになる。精神とは而も神の精である。精神あつてこそ活動し生存して居ることが出來る。もし、精神がなかつたならば活動を爲すことが出來ずに滅するより外仕方がある まい。故に神無きを口にする者は、それ自らが、非活動で無爲無能であるといふことを告白してをるわけである。何といふ憐れな叫びではありますまいか。

また、神經とは、神の通ずる經であります。神がないといふ者には神の通る經もない、即ち無神經であります。無神論の者は阿呆であります。

さて、靈とはさきに申した通り、至誠の精神であります。しかして、この靈なるものは、色もなく、聲もなく、香もなく、味もなく、觸もなく、また識もありません。そして、善惡を超越し、有無を超越し、量位を超越し、時間空間を超越し、物質や精神をも超越し、差別をも亦超越したる絶對であるが、これが發動するや、物質と精神を生じ、因果律に依つて大攝理の下に育成發達せしむる作用を爲すのであります。

色聲香味觸識無

叙上の事を、これから詳細に說明いたします。

靈は即ちマコトの心、これ至誠の精神—宇宙大精神をいふのであつて、絶對透徹したる光明の本體であります。しかして、この靈なるものは、見んとすれど色はなく、聽かんとすれど聲はなく、嗅がんとするも香りなく、味はんとすれど味はなく、觸れんとすれど觸はなく、また、識をもないのであります。

超越善悪

所くの如く、惡なきが故に、善とか惡とかと申すべきものもなく、全く善惡の支配を受けず、眞に善惡を超越したるものであります。

超越有無

また、宇宙間の現象非現象の總ては、有るとか、無いとかに支配されて居りますが、靈は何處に有るとか、何處に無いとかといふものではなく、ただ廣大無邊の宇宙に遍滿するところの實在であります。

超越量位

また宇宙間の凡ゆる現象はその大小淺淺を問はず、之を量ることが出來ますが、靈は量ることが出來ないのであります。太陽は如何に大きくとも、尚その直徑八十六萬六千五百哩といふやうに、之を量ることが出來、太陽系といふ星の社會の如何に廣くとも、またこれを量ることが出來ますが、靈は超量の實在であつて、大でもなく小でもなく、また淺いでもなく深いでもなく、ですから量ることが出來ないのであります。即ち、超量無限のものであります。そして宇宙現象の總ては、その大小を論ぜずこれを算ふることが出來ます。天空に運なる星の數は如何に多くとも、これを算ふることが出來るのでありますが、靈は一でもなく、二でもなく全く數といふものゝ支配を受けて居らぬのであつて、唯々宇宙に遍滿實在する絶對であります。私は靈は零であると思ひます。靈は數でなく、一でも二でもないのであります。算用數字の〇を幾つ並べても一でもなければ二でもないのであります。〇を一つおいてその左へ1を置くと十となり、〇を二つ並べると百となり、三つ並べると千といふ數になるが、1を取つて了ふと最早數ではなく、〇が三つ並べてあつても、一でもなければ二でもなく、十でもなければ百でも千でもない。即ち數ではないので算ふることが出來ないのであります。ですからこの點において零は靈であると思ふのであります。しかも、算用數字の零といふ記號は、〇であります。この

〇といふ形象は圓滿を表徴したるもので、しかも亦、算用數字は各國の差別なく世界を通じて使用が出來そして便益を與へるのであります。これを以て觀ますれば、〇の記號を造つた人は、これは慥に凡人でなく、必ず靈格を得たる人であると信じます。私が觀べましたところでは、名前はまだ分からないが印度の國の人であることだけは解りました。

超越時空

それから、宇宙の一切現象は時間に支配され、また空間の支配を受けて居りますが靈は時間や空間の支配を受けて居らないのであります。總てのものは、年月日時の影響を受け、また尺寸、呎、吋、メートルといふ場所即ち空間の影響を受けて居りますが、靈はそれ等の支配影響を受けないのであります。なぜかと申せば、靈には時間もなければ空間もないのであります。實は超量の時間と超量の空間が靈なのであります。

超越物心

また、宇宙一切の現象は物質の支配と精神の支配とを受けないものはないのでありますが、靈は物質や精神の支配を受けないのであります。

超越差別

また、宇宙一切の現象は差別の支配を受けて居りますが、靈は差別の支配を得ないのであります。天体の星を見ましても太陽とか月とか金星とか火星とかの差別があり。地上の物に見ましても、動物、植物、鑛物とか。人間界に見ましても、男女老幼賢愚等の差別がありまして、ありとあらゆる現象は、この差別の支配を受けて居るのでありますが、獨り靈ばかりは差別の支配を受けないのであります。實は靈には差別といふものはないのであります。即ち眞の靈、彼の靈といふやうなものではなく、唯、廣大無邊の宇宙

に遍滿する絶對の實在なのであります。

靈の作能

靈は斯くの如く、凡總の事物を超越したる絶對なるものでありますが、是が發動しますれば物質と精神を生じ、即ち生命體を現じ、それを因果律に依つて支配する。因果律と申すのは、善を爲せば必ず善果を生じ、惡を爲せば必ず惡果を生ずるといふ宇宙の眞理、この宇宙の眞理が即ち因果律なのであります。この因果律は、人間の作つた道德律や倫理の如く、强制力もなくまた不自然なものでもなく、洵に自然自由の大法則なのであります。即ち道德や倫理は、斯うしてはならぬ、あゝしなくてはならぬ。といふやうに强制力がありますから隨つて不自然なものであります。

宇宙眞理は自由則

宇宙の大眞理たる因果律は、少しも强制力などはなく洵に自然なものであつて、その善を爲すも惡を爲すも自由なのであります。しかし、善因を爲せば必ず善果を生じ、惡因を爲せば必ず惡果を生ずるぞよ。といふ、一大法則なのであります。お互に因果の一大法則を悟覺しましたからには、夢にも惡果を得るの愚を爲さず、常に善因を爲して善果を收むることに努力せねばなりません。善因を爲すには常に至誠の精神を以て生活するにあります。

大靈尊無量慈悲

この因果律によつて大摂理の下に育成發達せしむるとは、現象界にハミ出された生命體が、宇宙の大眞理たるこの因果の大法則あることを悟らず、至誠の精神のはたらきを爲さずして常に虛僞精神の生活を爲して宇宙大精神と融會一致することが出來ず、死して

魂となつて冥界に憩へば復現象界にハミ出し、尚未だ悟らずして死すれば、またもや現象界へハミ出し、かくの如くして宇宙の大眞理を悟得し、至誠の精神を以て全生活を完うし、宇宙大精神と全然融會一致するまでは、幾十度も幾百幾千萬度も、幾億度も現象界へハミ出して、遂に無明界を解脱し光明界に甦生し、永劫覺きせぬ生命たる　宇宙大靈たらしむるといふことであります。

噫　宇宙大靈尊の御慈愛の廣大なること斯くの如く、到底言筆などにて盡はすことが出來ないのであつて、唯々感謝合掌拜謝の外ないのであります。

靈能立證

靈は前述の如く、何物にも支配されざる絶對の實在であつて、これが作用は一切を支配する至玄至妙のものであります。靈は有無を超越し、最位を超越し、時間空間を超越し、物質精神等を超越し而も差別なきの絶對作用を減ずるものであることは、泰山數に於ける、靈學撮法その他の諸法術秘の法によつてその總てを立證することが出來ますが、今茲に、他の種々なる靈能現象を擧げて如何に靈は自由無碍の妙用を爲すものであるかを說明することにいたしませう。

瀕死の病人姿を現はして暇乞ひ

私の生母の父、即ち私の外祖父は若松市材木町の上野善藏と申まして、私が幼少の時に亡くなりました。この人は平素元氣旺盛でありましたが、五十歲位のとき病氣におかされ、病勢日々に募り重態に陷りまして、町内の人々も見舞に參るやうになつた。ところが祖父は、これ等町内の人々に對つて、『どうぞ心配しないで下さい。私が死ぬときは貴下方のところへお暇乞ひに參りますから。』と、いひましたが、町内の人々は誰もそれを信じて心に留る人もなく、唯『上野さんは、あんなに重態になつても、元氣だけは平常とちがはない』と感じ合つたに過ぎなかつたのであります。しかるに、病氣は次第に重り、いよ〳〵危篤に陷り、家族は勿論、親

族の人々が悲嘆に閉されて、その枕邊に在るの時、彼は、三十幾戸の町内を戸毎に姿を現はして驚ろひに歩いた事實があります。町内の唯一人の者にのみ彼の姿が見えたといふならば、その見た人の幻覺であつたであらうともいひ得ませうが、三十幾戸を戸毎に姿を現はしていとま乞ひに歩いた事實を見ますれば、彼の身体は自宅の病床に横たわり親族に見まもられて居るその時に、靈は一方に彼の姿を現じたものであることを信ずることが出來るのであります。靈越西線の會津若松驛より北に二つ目の停車場が喜多方驛といふのであります。この喜多方町の下町の町内の人々が、その町内の或人が病氣危篤に陥つたので之が平癒を鎮守の神社に願つて祈願せんと、今やその身仕度中、上の町内の人々は『何だ、今下の町内ではあの人の病氣平癒の祈願に往くとて騒いで居るに、あの人はあゝやつて歩いて往くではないか。』と、驚いて、上の町内の街路を歩行するのを見て居たといふことがありますが。これも前の靈象と同じく、その病人は自家の病床に呻吟して居るときに、靈は彼の姿を一方にあらはしたのであります。

靈魂大根を運ぶ

門生の一人に、馬場美濃守の後裔と稱する馬場健五郎といふ方があります。入門の當時は越後三條にをられましたが、その後は新潟市港町に移居されました。この馬場さんのお祖父さんが久しく病氣に悩み、遂に死なれたので直に菩提寺に使者を馳せて、その死を告げにやつた。ところが、寺の婦人は使者に向かつて

『それは、あなた何か間違ひでせう。あなたの家のお祖父さんなんか死になさるわけがなく、今しこの見事な大根（庫裡の土間にある大根を指さして）を持つて來て下すつたのだもの……。』

これを聞いた使者はびつくりして

『奥さん、冗談いひなすつちやいけません。家のおぢいさんは永らくの病氣で床についたつきりで今死なれたのです。どうして大根なんか持つてくることが出來ませうか。それは奥さんあなたこそ何か思ひ違ひをして居なさるのだ。死なないものを死んだなんて、嘘に告げに來るやうな私ではありませんよ。』

と、使者の眞面目にいふのを聞いた婦人は、何か思ひ當る節があつたと見え

『それではほんとうにおぢいさんがお亡くなりになつたのですか。』と、問ひ訊す。使者は

『奥さん、嘘に死人の告げは出來ません。おぢいさんが死なれたので家では上を下へと大騒ぎをやつて居るところです。』と、婦人『あゝ…ぢやアおぢいさんはほんとうに死になつたのだな。さういへば思ひあたることがあります。この大根十本はたしかにおぢいさんが今少し前、持つて來て下すつたに相違はないのですが、その時私はおぢいさんに

「あなたは長い間御病氣であつたさうだが、今はそんなに良くなんなすつたか。」と、申したところ。いつも話好きのおぢいさんが、不思議なことには何の返事もせずに出て往かしやつたのでわたしは甚しく思ふたのです。今にして思へば、その時のおぢいさんの影は何となく薄かつたやうでした。ぢやアこの大根はおぢいさんの魂が持つて來て下すつたのに相違ない。あなた早く家へ歸つてこの事を皆さんへ聞かしてやつて下さい。』

婦人のこの話を聞いた使者は、びつくり仰天し、家へ馳せ歸つて家人にこの話をすると、家人一同大いに驚き

「さういへば、おぢいさんが臨終者のとき裏の畑へ大根の種を蒔かれ発精されたが、病氣になられてからも。裏の畑の大根が出來たなら、その中の良いところを十本ほど先にお寺へ納め、それから家で戴くことにせねばならないよ。と、謂はれて居つたが、さては寺の奥さんのおつしやる通り、おぢいさんのたましいが大根を持つて往きなすつたのかも知らん。早く裏の畑を調べて見よ。」と大騒ぎ裏の畑へいつて調べると、彼方此方と丁度十本ほど大根を抜いた跡があるので、一同唖々その不思議に驚嘆したことがありました。と、馬場健五郎氏の直話であります。

右の事象は、馬場さんの祖父の体驅は病床にあつて今や死あらはれんとするの時、靈は裏の畑の大根を抜いてお寺へ姿を現はして持つていつたのであります。

生靈女を喰ひ殺す

明治十年頃にあつたことでありますが、先にお話した喜多方町在の一農家の主人が、或朝家を出たまゝ夜になつても歸つて來ないので。若い女房は夫の歸りの遲いのを心配して、村人へ話したので、村人も共に心配してそれ〳〵手分けして捜し始めた。ところが明日になつてもその所在がわからない。村人は近くよりだん〳〵遠くを捜すことになつた。早くも一週間二週間、一と月と經つたが、更に彼に逢ふた者もなければ所在も分からない。半年たつてもまだ更に何の便りもない。月日の經つのは早いもので、家出してから早既に一ヶ年を過ごしたが、依然として彼に會ふた者もなければ便りもなく所在は杳として分からない。

茲に於て、村人及び親族等がこの家に集まつて相談するには、「かうして大勢が長い間捜しても何處に居るのか更に所在が知れないところを見ると、世からいふ神隱しにでも會ふたか、または人跡絶えた山奥にでも死んで居るのかも知れない、生きて居るなれば、いくら遠方に居つたからつて、家には可愛い女房と一人の子供があるぢやないか、音信位はありさうなものである。それだのに何の音信もないところから見ると、これは必然死んで既にこの世にないものに相違ない。」と、衆議一決し、家出した日を命日と定め、滿一ヶ年目のその日、後愁ろに葬ひをした。

夫に死に別れたる女房は、年若いのに再縁もせず、貞操堅固に、かたみの嬰兒の成長をたのしみに專心農業に勵むでゐた。然るに夫が死んで恰度六年目、村人が伊勢參宮へいつて歸つて來るやこの家へ來り、女房に向つて、

『俺はお前の夫に遇ふて來た、お前の夫は生きて居たよ。』と、語つたが、女房はこれを信ずる響がない。

『女と思ふていゝ加減なことをいうて、揶揄のはよしなさい。死んだおやぢが生きてゐるわけがないぢやないか。』と、とんと語しに乘らない。村人は熟々心こめて

『さうだ、尤もだ。死んだと思ふて六年前に葬式まで濟ましたその人が、今、無事に生きて居らうとは、お前ばかりぢやない誰でも信じまい。しかし、この俺がこれまで何一つ嘘ついたことのないことはお前はよく知つて居らう。俺は村人へは伊勢參宮のお土產物を買つて來たが、お前にだけは買ふて來ない。それはどんな高いお土產物よりも、この話を聞かするのが何よりのお土產と思ふた

からだ。お前の夫はほんとうに生きて居るんだぜ。俺はおやぢの家に二晩も泊つて御馳走になつて來たんだからほんとうなんだよ。』と、語る調に動かされたが、尚も女房は半信半疑

『ぢやア、何處にどうして生きて居たのか、それを聞かして下せいよ。』

『それ、その事だよ、お前に聞かせたいと思ふのは。お前の亭主は上方の岐阜といふところに居つてな、しかも身体は無事息災でな、それに若い美しい女な女房にして至極仲よく暮して居たんだよ。』と、正直一點張りの村人は、少しも隱さず有りのまゝを語つて聞かせた。ところが之を聞いた女房は

『ア、口惜しい〳〵。』と、叫び乍ら泣きつづけ、遂に人事不省に陷つて了つたのである。村人はそれが人事不省に陷つたとは悟らず。「こら女房〳〵。」と、ゆり起さうとしても目を醒まさないので、悅ばせやうと思つて聞かせたのに却つて悲しみの種となり、泣き聲入りに變入つたものと思ひ、明日また來て慰めてやらうと、獨り言をしながら家へ歸つていつた。

日は既に暮たのに母は生態なく變入つて居るので子供は母の傍へ轉寢して終つた。ところが、女房は夜更けてカバと斗り目を覺し「あゝ、うれしかつた〳〵。」と、叫ぶ聲に側に寢て居た子供は夢破られてフト目をさまし『お母ア何がうれしかつたの。』と、訊くと女房は『あゝうれしかつたよ。岐阜とかといふところで、家のおやぢを莫迦にして居る女といふのを、今喰ひ殺した夢を見たんだよ。あゝうれしかつた〳〵。』と、いふを聞き、子供心にも、たとひ夢にでも人を殺したといふ母の言葉に驚いて、母の顏を見護ると、その口端に血の付いてゐるのを認め更に驚いて『お母アお前の口ばたに血がついてゐるよ。』と、いふたが、女房は『あゝさうか。』というて血を拭ひ、別に氣にも止めない樣子であつた。

然るに、それより數ヶ月後のことである。門邊に現はれたのは、六年前にこの世に亡きものと思ひ、弔ひまでした夫である。どう見ても死人ではなく正に生きたる人間である。六年の長き間、妻子を捨て他國へ走り、伏し女と巫戲て居つた亭主かと思へば、獨みかゝつて喰ひ殺してやりたいほど憎らしいが、また、一旦この世に亡き人と諦めたその人が、無事息災で歸つて來たかと思ふと、

個實天にも登つたやうな嬉しさであつて。喜怒哀樂の情交々臻り、唯無言のまゝ亭主の顏を見詰めるばかり。門邊に立つた亭主は、そぞろ今昔の感に耐へず、これまた萬感胸に迫り言葉を發する能はず、無言のまゝ家に這入つた。日數經るまに、元の仲良き夫婦となつて、或夜の寢物語りに女房は夢の話をした。これを聞いた亭主は打ち驚き

『指折り算ふれば、丁度その月その日のその夜の寄のことである。岐阜に一緒に居つた女は、何物とも知れぬものに喰ひ殺され、悲嘆をあげて死んだのである。さてはあの時、お前の魂が來て喰ひ殺してあつたのか。』と、戰き恐れたといふ事があります。

殺されし婆の亡靈つきまとふ

曾て、宇都宮在に一人の婆あさんがゐた。孤獨ながら小金を貯めてゐて老後氣樂に暮してゐた。ところが或宵のこと、一人の强盜が來て、婆あさんを縛り殺し虎の子と大切にして居た有金全部を强奪して、宇都宮市へ逃げて來て、或旅館へ投宿した。宿屋では

『さあ、お風呂が沸いて居りますからお這入なさい。』と、いふ。そこで、强盜は風呂を浴び、もとの二階座敷へ歸つて見ると、もうお膳が二人前運ばれてある。間もなく女中が給仕に上つて來た。强盜は女中に向ひ

『ねえさん客はどんな人だね。』

『あなた方お二人さんだけで、別に御客樣はありません。』

『客がなければ、お膳は二膳いらないぢやないか、私一人分でいゝのだから一膳は下げなさい。』

『あゝさうですか、下ではお二人さん連だというてるんですよ。』

『それはなんかの間違ひだらう。俺は一人限で連はないのだから、一膳は下なさい。』

『さうですか、それは不思議ですね。』と、女中は給仕をすまして、一膳はそのまゝなのを下ていつた。暫くたつと今度は別の女中が床を伸べに蒲團を運んで來た。見て居ると二人分を敷くので、

强盜は

『オイねえさん、今晩客はどんなお客樣だい。』

『別に御客はありません、あなた方ばかりです。』と、いひつゝ二人前を伸べる

『やあ、この家は妙な家だね。先刻も俺一人のところへ二人分のお膳を持つて來たり、また、俺一人寢るのに二人分の夜具をのべるなど、ほんとうに妙だよ、一體客があるならあるといふたらよいではないか、客があるのにないなんかいふのは、客を馬鹿にするものだ。』と、癇にさわつたやうにいつた。女中はこれを聞いて憤然とし、

『あなたこそいゝ加減なことをおつしやるぢやありませんか。お連さんがあり乍ら、ないなんていふのは、それこそ人を馬鹿にしてるでせう。』

『そんなにいふなら、俺の連といふのは一体男か女かどんな人なんだい。』

『それ御覽じろ、お連さんは御婦人さんなんですわ。』

『婦人といふのは幾つ位のだい。』

『それは、あなたが御承知でせう。色の淺黑い六十歳斗りのお婆あさんなんですわ。』

これを聞いた强盜は腕にギクリと釘を刺された思ひ。あゝ、あの婆アがと思つたが、道は殺人强盜をやるやうな奴ですから、すぐと素知らぬ風をなし、平然として

『それあ、ねえさん何かの間違ひだらうよ。考へて御覽。俺に若い女でも婆あさんでもつれがあるならば、さつき持つて來たお膳を一人前そのまゝ下げる筈がないぢやないか、俺ばかり食うて連に食はせぬわけにはいくまい。俺一人で、つれがないからこそ下げたのだ。よく考へてごらん。』と、いはれて見れば、成程、連さんがあるならば、お膳を下げる筈はない。ぢやアほんとうにお一人さんか知ら。と思ひ、女中は

『それにしても不思議なことですね。先ほど、あなたが店へお入りなすつた時には、見世の帳場には妻と帳場さんと二人居つたのです。そして、あなたの後からつづいて一人のお婆あさんが這入つて來なすつたので、今が今まで帳場さんも妻も、その婆あさんはあなたさんのお連とばかり思つて居つたので。ぢやあ、あのお婆あさんはあなたのお連さんぢやなかつたんですか。どうも不思議なこともあればあるものですね。』

『ウム、そんな婆あさんが俺のうしろから這入つて來てあつたのか、しかし、俺はいまいふた通り一人で連などはないのだ。その婆あさんは、この家へ用あつて來たのか、または外の客に用でもあつて來たのか、それは俺の知るところぢやない。とにかく俺は一人なんだから、一人分のとこを伸べてくれればよい。』女中はこれを聞いて、

『どうも不思議のことがあるものですね。』と、いひながら一人分のとこをのべて下がつていつた。女中は下がつていつたが、腑安らかならぬは强盜である。

『アノ婆アが、斯う俺につき纏つて居つては到底免れつこはない。これは一そのこと自首しやう。』と、決心し、宿屋の隙をねらつて表へ飛び出し、宇都宮警察署へ自首した事件があつて、これを辯護したのは東京の某辯護士であつたのです。

叔父の亡靈と一緒に歸國

私は先年、越後新發田へ出張しました時、入門者の中に高橋七平といふ新發田在加治川村の老人がありました。この老人が私の今の話を聞いて、恰度私も若い時に今のお話と同じやうなことに會ふたことがありましたとて、その當時の事象を書いて私の手許に出されたのが左の如きものであります。

北瀧廓那榮寺村宮川、石井健吾（仮名）（健吾は自分の叔父也）は訴訟事件にて明治九年頃より上京、芝區西久保櫻川町吉川某方に下宿し居り、三年越にて滯く事件も片付みたるにより歸國することゝなりしが、歸國の途次、京都北野の天滿宮へ參詣せんことを思

ひ立ち、明治十一年二月八日東京を發足し（當時は東海道線の汽車なし）その夜は東海道戸塚驛小島某旅館に宿泊せしところ、午後十時頃より脚氣病を發し苦悶甚だしく、戸塚の醫師兩三名驗官立會の下に種々手當を盡くすと雖も、遂に其効なく夜半二時半頃死亡せしを以て、小島某醫の診斷書添付の上國元へ通知來りたるにより（當時は電信も電話もなし）親族相談の上、高橋七平（自分）と從弟の石井兼吉の兩名死體引取のため上京、叔父が長らく下宿し居れる前記、櫻川町吉川方へ立ち寄りしに、吉川氏も同道することになり、戸塚驛へ着きしは、その死亡後二十一日目なりき。

それより假埋葬しある同驛の眞言派の寺に至り、それ〴〵手續きを濟まして再掘し火葬に附する前に同寺本堂に於て讀經を願ひたる時、自分等叔父の死顏を見んと開棺せしところ、死者の兩眼より淚數滴、また鼻血流れ出で半紙二十枚を潤ふせり。それより火葬に附し、右の吉川氏と別れ燒骨を持ち歸る途中、長野善光寺前、扇屋五郎館へ宿泊せし際、靈頭が宿帳を記入に來りたるにより、自分と石井兼吉二人の住所姓名等を申せしに、靈頭は貴郎方はお三人連ですが、もうお一人の方のお名前はと問ふ、否自分等は二人丈けなりと申聞けたるに、靈頭はたしかにお三人樣のやうなりき。と、不審な面持をなして座數を立出でたり。

程經て下女夜具三名分持參せしにより、合客あるならんかと尋ねしに、合客とて別になく、自分等三人分なりとの事故、さきの靈頭の言といひ、また、この女中の申分といひ、如何にも不審に堪へざるにより、三人連といふその一人は如何なる人相の者かと問ひしに、斯く〳〵なりといふを聞けば驚くべし、正に叔父健吾氏の靈柩は自分等兩人には見えざりしも、宿屋の者共にはよく之が見えたるなり。之に依り叔父健吾氏の靈は我等と同道歸國しつゝあること疑ふべからざる事實と確信したり。云々

亡靈の乳にて育てられし赤兒

或藩給の官吏の愛妻が、產後の病で死んだ。彼日暮方途方にくれて赤兒を抱いて居ると、その傍へ亡き妻の亡靈が現はれる。さう

すると何となく抱いて居る赤兒を、亡靈の方へ引寄せらるゝやうな氣がする。そこで、亡靈の方へその赤兒を近づけると、亡靈は赤兒の口へ乳を撮き込む。斯くすること毎夜〳〵、遂に三年の間亡靈の乳で育て上げられたる子供が居る。

私が今より十餘年前、越後五泉町の安勝寺へ參つたときに、當時の住職興龍さん夫妻も入門された。そのとき右の話をしたところ、妻女のいはるゝには、

『私の親類にもそれに似た事がありました。私の親類に新潟の沼垂町上二の町に山田といふ家があります。今、二十四五歳の息子がゐますが、この兒が生るゝと間もなくその母は死んでしまつたので、この兒を里子にやりました。ところが、里親が夜、この兒を抱いて乳をくれて居りますと、この兒の母の亡靈が里親の肩の傍りに姿をあらはして、赤兒の口に向つて乳をはぢき込む。また、赤兒を抱いて寢ると、その傍へチャンと姿を現はして居るので、里親はかういふ亡靈の所業に無味惡く、赤兒を預け主へ返してくる。それで、また、方々里親を搜してはたのむ。今度預かつた里親も亦右と同じ事情で返して來る。その父親は途方にくれて泣く兒を抱いて、裏の薄暗い土藏へなど入ると赤兒の泣くのはピタと止まる。夜二階の自分の寢室でこの兒を抱いて床へ這入るとその傍へ亡き妻の姿が現はれる。といふことがありました。』云々

老婆の亡靈が預け金の取返し方を帝大講師島地氏に賴む

東京帝大文學部の講師をして居られた眞宗の僧侶、島地大等といふ方、今は故人となられましたが、今より十餘年前のこと、越後北蒲原へ布教に往かれ、或村に滯留中のことであつたが。或夜遲くまで一人で書見をして居られたところが、その室の片隅へひよつこりと婆あさんの姿があらはれた。島地さんは

『婆さん、あなたは今ごろ何用あつて、こんなとこへ姿をあらはしましたか。』と、聞いた。婆さんは

婆『私は、この村の何某と申すもので御座いますが、私は生前一人者であつたので、私の死後お寺へ納めて貰ふやうに金二百兩を村の親類何某に預けて置きました。ところが、わたしが死んでから幾月と經ちますが、まだお寺へ納めてくれません。それで、どうか和尚さんのお力でお取返し下すつて、お寺樣へ納めてねがひたいと思つて、今晩お願みにこゝへ出たわけで御座います。』

島地『さういふ御用件か。それならば私にお願みなさるよりは、あんたはさう自由に姿をあらはすことが出來るのだから、直接先方へ姿をあらはして催促なさるがよい。』

婆『ご尤もであります。わたくしはこれまで幾度か催促しやうと思ひ、先方へ姿をあらはしましたが。初めは先方の主人ばかりでありましたが、その後は子供までがわたしの姿を見ると、眞言の有がたいお經を讀むので、いつも姿を消されて目的を達することが出來ずに居りました。そこで今晩和尚樣におたのみして是非取り返して戴ひたいと思ひお願みに出たわけであります。』

島地『あゝ、さういふわけで今晩出なすつたのか。それならば承知しました。必ずとりもどしてあげるから、婆さんその家へ案内なさい。』と、婆さんの案内によつてその家の前にゆき。島地さんは表戸をトン〳〵と叩き、

『夜中起してお氣の毒だが、ぜひ今晩會はねばならぬ用事ができたから、こゝを開けてもらひたい。』家からは主人の聲で

『誰だい。今ごろ…用があるんなら明日來い。』と、傲慢ちきな聲でいふ。島地さんは

『わしは、この村へきて居る島地なんだが、今ばんぜひ會はねばならぬ急用ができたので參つたのだが……。』島地さんと聞いて主人は飛び出して來て

『まあ、和尚さん今頃何御用が出來たんです……さあ〳〵早くお這入りください。』と、いひ乍ら、内より戸をあけると。島地さんの傍に婆あさんが立つてるので、主人は思はず一心不亂に眞言の陀羅尼經を讀んだ。ところが婆あさんの姿は消えて了つた。主人は婆あさんのことは知らぬ顔……、

『さあ〳〵和尚さん座敷へお通り下さい。』と、慇懃に案内する。島地さんも婆あさんのことには氣がつかぬ風を裝ふて座敷へ通

つた。主人は
『和尚さん。こんな眞夜中にどんな急用が出來たんですか。早くお聽かせを願ひたい。』
島地『あ、お話しするくらゐぢやない。その用件といふのは今お話しませう。』と、いふや否や聲を高めて
『婆あさん。わたしは今、眞言の有がたいお經よりも尊有がたい念佛を唱へるから出て來なさいッ。』と、一心不亂に念佛を唱へた。ところが、婆あさんがそこへひよつこりと姿をあらはした。これを見た主人は顏靑ざめ、ぶる〳〵と慄え出した。島地さんは主人に向ひ
『あんたはこの婆あさんを知つてゐますか。』
主人『知つて居るくらゐのこつちやありません。』と、ふるえ聲である。
島地『あんたは、この婆あさんが生前に於て死後に寺へ納むべき金二百圓を預かつて居なさるさうだが何うかな。』
主人『たしかにお預かりいたして置きました。』
島地『婆あさんが死んで最早幾月にもなるのに、なぜまだ寺へ納めなさらんか。』
主人『納めやう〳〵と毎日思ひながら、つい〳〵他の用が忙しいので今日までのび〳〵になり淘に申譯ありません。明日こそは必ずお寺樣へ納めますから明日まで御猶豫を願ひたい。』
島地『いけません。。あんたは死人に口なしと思ふて、死人の金まで橫領する至極惡い人だ。あんたのいふことは信用は出來ないから、たつた今その金を返しなさい。』
主人『手許に金があるなれば今お返し申しますが、手許にそれだけの金はなし、今は眞夜中のことゝて金策も出來ませんで、明日になれば、銀行から金を引出して來て必ずお返し申しますから、どうぞ明日まで猶豫をお願ひいたします。』
島地『今、手許にそれ丈の金はなし、夜中の事で金策は出來ないといはるゝなれば、これも仕方がない。それなれば婆あさんの面

前に於て、明日までの預かり證を書きなさい。』『承知いたしました。』と、主人はふるえる手で明日までの預かり證を書いた。
島地さんは、この證書を見て婆あさんに示し
『この證書を取つたからには、明日は必ず取返してお寺へ納めて上げるから安心して引つ込みなさい。』と、いはるゝと、婆あさんは、莞爾として姿を消した。そして主人はその翌日、二百圓を島地さんのところへ持つて來、島地さんはこれを寺へ納めたといふことがあります。

寺の娘の夢に現はれた旅人

大正七年二月二十四日のこと、新潟縣東蒲原郡津川町字上町の澤野六郎といふ老爺が、
『俺は、下までいつて來るから。』と、家人にいうて家を出た。下とは津川町から西方數里を隔つる中蒲原郡柳松町の娘の嫁入り先を指すので、いつも其所へ行くときは下までいつて來るといふを例として居るので、この日も家人は、六郎が柳松町の新婚へいつたことゝ思ふて居た。ところが、その晩、同縣刈羽郡柏崎警察署から、
「澤野六郎死んだ、死體を受取りに來い。」といふ通知が來た。家人は一時驚いたが、しかし、家のおとうさんは柳松へ往かれたので、柏崎なんかへ往かれない。これはなにかの間違ひだらうと思ふたが、外の事とは違ひ、死んだといふことがらなので、そのまゝには捨置けず。一体おとうさんは何處までの切符を買つて汽車に乘られただらう。……一つ停車場へいつて調べて見やうと。息子さんが停車場へ馳せつけて調べたところが直にわかつた。この津川町は小さい町なので、驛員は町の人をよく知つて居る。澤野六郎は伊勢山田までの切符を買つて乘つたのであつた。家を出るときは下までと、柳松町へ往く氣であつたのが、途中で急に伊勢參宮を志したのか、又は、始めから伊勢參宮を志し乍ら、家の者へはわざと柳松へいつてくるやうにいふたのか。それは、どちらか分からないが、伊勢山田までの切符を買つて乘つたことは事實なので、それなれば新津驛から信越線に乘り替へて、柏崎を通過するのだ。ぢやあ、おとうさんはほんとうに死なれたのかと、息子さんを始め家族一同は大いに驚き且悲しみ。直にも柏崎へ往かうとし

たが、最終列車も通過した後でその夜は如何ともいたし方なく、翌る朝、一番列車の来るのを待つてこれに乗り、息子さんは柏崎へいつたのであります。

澤野六郎は何處でどうして死んだのであらうかと申せば、同日信越線上り列車が柏崎より二つ手前の北條驛へ着いたとき、車掌が、列車内の便所の中に一老人の頓死して居るのを發見した。しかし、同驛は一分停車のところなので、それを降ろす暇なくそのまゝ柏崎驛までゆき、こゝで降ろし警察や町役場の手で、柏崎驛の附近、枇杷島村の教通寺へ假預けとしたのであつた。話はこれだけならなんの意味もないが、澤野六郎の死體を預かつた教通寺には、當時十八ばかりの娘さんがゐた。この娘さんが前夜の夢に一人の旅人が現はれて、

『私は、明日こちら樣へお世話になりますから、どうぞよろしくお願ひいたします。』と、たのんだのである。娘さんはその翌朝、住職の父にこの夢の話をした。住職は之を聞いて

『それでは、今日はお客さんが來るだらう。』と、いふた。寺でお客さんといふのは死人のくることをいふのであります。

しかるに、その日、正に一人の死人が寺へ運ばれて來た。しかも、それが昨夜娘の夢に現はれた旅人であつたのだから、娘さんの驚きは一通りでなかつた。然らば、澤野六郎が寺の娘の夢に現はれたその時刻には、彼は何處に何をして居つたのかを、その後私が津川町へ參りましたときに調べて見ましたところが、恰度、その時刻には彼は町の小料理店の廊邊に於て、その家の主人と酒酌み交し乍ら愉快氣に世間話をして居つた時なのであります。即ち、彼は明日死ぬことも知らずに愉快さうに酒飲みをやつて居るその時に、靈は教通寺の娘の夢に現はれて明日のことをたのむだのであります。

この死人が津川町の澤野六郎であるといふことが分かつたのは、彼の袂の中に北蒲原郡新發田町の永井醫師から彼宛のハガキがあつた爲であります。澤野六郎は何か訴訟事件でも永井醫師に頼むで置いたものと見えます。

斯ういふ靈的現象を擧げれば際限もなくなりますので、この位にいたして置きませうが。今までお話いたしたのは、死して後、ま

たは將に死せんとするときに委を現はした事柄でありますが、健康に生存して居るときに於ても委を他へ現はさんとすれば顯はすことが出來るのであります。今その實例をお話申ませう。

念寫の實驗

大正五年の秋、文學博士福來友吉氏の主催で、岐阜縣大垣町(當今は市)の劇場に於て念寫の實驗を行ふ事になりました。

一寸、茲に念寫といふことについてお話を申して置きます。念寫と申すのは、寫眞の乾板を木箱その他感光せざる物に入れそれに對つて、その寫さんとする物事を思念し、靈力をそれに作能するのであります。そして後、現像液にその乾板を浸せば、さきに思念したる事物が寫し出される。これを念寫といふのであります。

さて、この日の實驗者は靈能ある東北の一青年であつて、その實驗に立ち會つた人々は、可兒陸軍中將、川村大垣警察署長、その他士地の有志數名であつた。何を念寫すべきか……といふことになつて、各自思ひ〳〵の題を出した。日本一とか金剛とかいふ文字の希望者もあつた。川村警察署長は大垣城といふ題を出した。そこで先づ川村署長の望みの大垣城を念寫することになつた。大垣城は大垣公園となつて居ります。

ところが、この青年はその日始めて大垣へ來たばかりで、大垣城を見たことがない。それで、念寫する前に大垣城を見てくることにした。そして、これから大垣城を見て參ります。と、衆人の面前、舞臺の上に端座瞑目すること稍暫時、それから眼を開いて

『今、私は大垣城へ往く途中で一老人に遇ひまして、大垣城へ行く道を聞きましたところ、大層親切に聞かしてくれましたので、大垣城へ參りましたところ、或石碑の下に青年男女が巫戲て居りましたので妨げられました。』と、いふたので、川村警察署長は直に隨行の巡査を大垣城へ走らした。巡査は駈け足で往復し、署長に復命すらく

『大垣城内招魂碑のもとに士地の藝妓と一人の青年が巫戲て居りましたので立ち退きを命じて參りました。』と、これを聞いて、

居並ぶ人々は、何れもその不可思議に驚嘆した。

青年は再び端座瞑目すること少時にして

『よく見て參りました。』というて、感々念寫の實驗にとりかゝり、念寫を行つたところ、見事に大垣城は寫つた。それから日本一とか金剛とかその他の出顯の總てを念寫したが、何れも見事の出來ばえで、この日の實驗は大成功を收めたので、人々はその神秘的なることを賞讃して已まなかつた。

しかるに、唯こゝに一人、川村警察署長だけは

『これはどうも怪しからん。僕等の面前の舞臺に居り乍ら、遠く離れた大垣城へいつて見て來たとか、途中老人に會ふて道を聞いたとか、どうも審しいことだ。』と、大いに疑惑の念を懷いた。然しそれは尤もなことであります。なぜかと申せば、由來、靈的現象については、靈力を體得し靈能を發現したることなき凡夫等は、到底理解が出來ないのであるから、素より疑ふのは當然であります。殊に、平素疑ひといふ眼鏡を通して社會を見て居る警察官吏に於ては、一層疑念を以てこれを迎ふるのはまた已むを得ないことであります。

それで、川村警察署長はその翌朝、一人漂然として大垣城に向つて歩を進め、途中、碧山翁の處へ立ち寄り

『昨日離れか大垣城へゆく道を聞きに來た者はなかつたかな。』と、訊いたところ、碧山翁は

『ありました。昨日何時頃、二十歳位のフロックを着けた青年紳士が參りまして、大垣城へ行く道を聞きましたので、詳しく聞かせてやりました。』と、これを聞いた川村署長は、昨日その時刻にはその青年はフロックを着て、大垣廣場に於て自分の面前に居つたのが、その時また此處にも姿を顯はしたといふことを確め得ると共に、その不可思議なることに眞に吃驚したのであつた。

斯くの如く、生存中に於ても他へ姿を顯はさんとすれば、靈能作用によつて自由に現ずることが出來るのであります。

次ぎに靈は物質を超越し、物質を支配するものであるといふことについて二三の實例をお話申ませう。

觀音木像自由に出入

大正六年の一月、雪若松市にある會津日報の編輯長、櫻本鷹吉君が私のところに來られて

『先日、父が私の所へ參つて(櫻本君は父と別居す)不思議な話をしました。それは先夜父の夢に觀世菩薩が現はれて「おれは七日町の阿彌陀寺(阿彌陀寺は櫻本君の父の住居より八町斗りのところにあり)の前の川に埋れて居るから掬ひ上げてくれ。」と、かうおつしやつたので、父は、これは不思議の夢を見た。明日早速いつて見ねばならぬ。と、思つたのだが、明日になると雜用に取紛れて夢のことを忘れて了つた。ところがその晩寢ると、また同じ夢を見たので明日こそはと思つたのだが、その明日もまた雜用のために往くことを忘れた。しかるに、三夜さ目の夜中にブッッといふ音がしたので眼をさましたが、多分表を通りかゝりの若者でも戯らに表戸へ石でも投つけたのであらう。(若松は雨戸は昔から板戸は少く厚三尺が板で上三尺は紙張の障子戸を用ひて居ります。近年は板戸やガラス戸が多くなりましたが、まだ舊來そのまゝの障子戸を用ひて居る家も澤山あります)と、強くも氣にとめずそのまゝ寢入つて了つた。

しかるに、翌る朝、いつもの通り顏を洗ひ手を淨め、佛壇に禮拜しやうと佛壇の扉を明けると、その正面の壇上に一寸ばかりの木像の觀世菩薩、しかもまだ水氣のあるのが安置されてゐる。これを見た父は大いに驚き「觀音樣が二晩もつづけて夢にお願みになつたのを、雜用のために忘れていかなかつたので御自分の方からお出下すつたのか、まことに濟まないことでした。」と、心に誓ると同時に、昨夜のブッッといふ音を聯想した。それで直に表障子を調べて見ると小さい穴だに穿いてゐない「さては、あの音のした時にお觀音樣が飛び込みなすつたのか、それにしても、障子も破らず、佛壇の扉は閉されたるまゝなのに、どうしてこの佛壇の中へお這入りになつたのであらう。どうも不思議で堪らない。」と、かういふ話を聞かせてくれましたが、私も、どうも不思議でなりません。一體これはどうしたわけでせう。ぜひお聞かせを願ひたい。』とのことでしたから、私は直その理由を說明し、解決を與へてやりましたが。今、皆さん方には、他に解一つのこの種の靈驗を擧げて、ともに解決を與へることにいたしませう。

黄金の觀音空海を呼び止む

これはチト古いことであります。昔會津の河沼郡野澤町より一里ばかり離れたところに千潟村といふのがありました。その附近に千潟といふ潟があつたのでそれが村名となつたのださうであります。或年一人の六部（修驗者）がこの千潟村を通り過つたとき、村人に訊ねますには

『今は米を播く季節なのに此の村ではどうして田を荒つぱなしにして耕さないのか。』

村人『お訊ねは御尤もでありますが、此村では、折角、田を作りましても秋になつて稔つて來ると、澤山の小鳥が來て稻の穗先を皆荒して了ふので、作り甲斐がありませんからこの頃は作ることを止めたわけです。』

六部はこれを聞いて

『偖々それは氣の毒なことである。しからば、これなる觀世音菩薩を授けるから、村人はこの觀世音菩薩を信仰せよ、しからば決して小鳥は來ないから、今年から安心して田を作りなさい。』と、授けていつた觀世音菩薩。村人相集まつて之を見れば、金光燦然たる黄金の觀音像である。村人は一齊に、これは尊い觀音樣に相違ない。と、俄に、さゝやか乍ら一堂宇を建立してこれを安置し、六部が言ふがまゝその年からまた田を作り初めた。ところが稻は上出來で、秋になつて稻穗は垂れるばかりに稔つたが、六部がいふ如く一羽の鳥も荒しに來なかつたのであります。

村人の喜びはこの上なく、この觀音樣は尊い御方だと、村人の信仰の念は彌増し嵩まり、それよりは毎年稻作に精出して居つたのであります。

月に叢雲、花に風　鬼角好事に魔多しとは昔も今も同じ事で、それが浮き世の常態であります。千潟村の人々が觀音像を六部から授かつて數年後のことであつたが、大暴風雨襲來して、千潟の水は氾濫し遂に潟は切れて大洪水となり、遂に千潟村の民家は流され

、觀音堂も共に流されて阿賀野川へと落ていつたのであります。

それよりずつと後のこと。僧空海（眞言宗の開祖にして弘法大師と稱す）が、勅命を奉じて北陸から奥州へ佛法を弘むべく、越後路から次第に奥州會津へ入り、前に申した河沼郡野澤町に程近い阿賀野川べりを、獵りタヨ〳〵と歩いて來ると、うしろから「空海〳〵。」と呼ぶ聲がする。空海は「ハテなこの邊には我名を知つて居る者がない筈だのに。」と、後を振りかへつて見たが、更に人影もない。「だが、たしかに我名を呼んだものがあつたに相違ない。」と、よく後の方を見詰めて居ると、そこに紫の雲のたなびくのを認めた。空海はその紫の雲の立昇るところを見ると、其は阿賀野川の川面からであつたので、空海は水邊に降りて、紫の雲の立ちのぼる水面を凝視すると、水底に何かしら、光りを放つものがあるので、空海は手を水中へさし入れて、これを掬ひ上げて見ると、これなん、黄金の觀世音像であつた。空海は「あゝ、今わが名をお呼びなされたはこの觀世音菩薩であつたか。これは尊き觀世音菩薩である。」と、恭々しくこれを捧持し、會根つたへに來たつて、野澤町を去る半里ばかりの所へ一堂を建立し、此處へ安置したのであります。この觀音像はさきに申した、千潟村の洪水に流されたものであります。之ぞこれ、數百年を經たる今日までも、靈驗いやちこなりと、參詣者引きも切らざる鳥追觀世音菩薩とはこれであります。

この鳥追觀世音菩薩の御像は、誰人も厨子を開けて見ることは出來ぬ、萬一、犯すものは眼が潰れる。と、昔から戒めてあつたのに、今より十數年前の堂守が、或夜泥酔の上「餘人はいざ知らず、堂守の俺が見て悪いといふことがあるか。」と、自分勝手の理屈をつけ、堂に入り厨子を開けると、忽ち眼眩失明したので、その戒めを破つたことが發覺し放逐されたのであります。

靈象は物質科學で説明不能

さきにお話した復本君のおとうさんのところへ、飛び込んだ觀世音菩薩は木像であります。木像は一つの木片に過ぎません。下駄の木も柱の木も机の木も亦同じ木片であります。今、物質科學の知識を以て是等の各木片を分析しましたならば、同じ原素を發見す

るの外、他に異りたる何物をも認むることが出來ないのであります。しかるに、他の木片は障子も破らず、扉をも開かずに自由に出入することが出來ないのに、獨り木像たる木片のみが何故、斯くの如く自由自在のはたらきを爲し得るのでありませうか。これ等の事象については物質科學の知識などでは到底解決が出來ないのであります。

また、空海を呼び留めたる觀世音像、これは黄金であります。指輪の金も入歯の金も時計の鎖の金も亦同じ黄金であります。これ亦物質科學の知識を以て、この兩者を分析したならば、唯、同一の原素を發見するのみで、更に何等異なつた何者をも發見することが出來ないのであります。しかるに一は靈を發し、他は靈を發することが出來ないといふことの、如何なる理由に基くかは、これ亦決して物質科學では說明が出來ないのであります。

不思議なる靈象の解決

然らば、これ等奇異なる現象の原因は何であらうか、私はこれから詳しくこれが說明をいたしませう。

昔、佛像を彫刻した人々の多くは、高德なる僧侶であつたのです。**高德とは靈力を體現し衆生を濟度することに努力したる人の行爲に對し尊敬したる名稱であります。**卽ち高德なる僧侶とは、靈力を體現したる佛門の人をいふのであります。此靈力を體得したる人が、衆生を濟くはんとの慈悲より一心籠めて彫んだものであります。故にその彫んだ物質には**靈力**が宿つて居るのであります。しかして、戸障子も開かずに自由に出入し、また自由に靈を發したのは、皆、その物質に宿つて居る靈力の作用なのであります。

密閉の室內へ肉体の自由出入

斯くの如く、靈力は物質の妨げを受くることなく、物質を自由自在に爲すことが出來得るのであります。皆さん方の肉體は、それは正に物質であります。故に、もしそれ、その物質に靈力が充滿しましたならば、私が豫てお話いたしました通り、天井を拔かず

とも、戸を開かずとも自由自在に家屋に出入することが出來るので、これは火を睹るより明かなることであります。

曾て、フランスに斯ういふことがありました。乙なる人が甲なる友人から「キウヨウデキタスグコイ」といふ電報を受取つた。そこで乙は早速自轉車に乘つて停車場へ駈けつけ、汽車に乘つて甲の處へ急行しやうとしたが、乙が停車場へ駈けつけたときは、生憎、汽車の出た後だつたので、その次ぎの發車時刻までは餘程の時間があるので、それを待つよりは甲の處はさう遠くもないのだから、自轉車でいつた方が早く着くので、汽車に乘ることを變更して、自轉車を走らした。しかも道路は平坦であるのに、何うしたことか、車輪の廻轉が非常に速くなつて來て、足をペタルに掛けて居ることが出來ず、兩足はペタルから離し、ただ兩手でハンドルを握つたまゝにして居ると、自轉車は益々疾走を早め、そのあまりに早きがために、或村を通過したまでは覺えがあつたが、その後は更に覺えがなくなつたのであります。

誠しかはつて、乙に電報した甲は、自邸の事務室で、窓の硝子戸を閉ぢて、何か類りに書類を調べてゐたが、轟然たる音響にハッと眼を上げて見ると、そのテーブルを隔てた向ひの椅子に、乙が端然と腰掛けて居る。これを見た甲は呆氣にとられて乙の顏を見つめて居ると。乙は、ふと眼を開き、これまた怪訝な顏をし室內を見廻し、

『やあ、僕はいつ此處へ來たのだらう。』と、いふと。甲は

『君、とぼけたことをいふなッ。一體、君はだれに斷つて、何處から此の部屋へ這入つて來たのだい。』

乙『どこから這入つて來たつて。君は此處に居たのだから、僕がどこから這入つて來たか僕に聞かなくとも良く知つて居る筈だ。』

甲『僕が知つとる、知つとらんよりは、君は君自身の身体ぢやないか、どこからはいつたといふことを、自分で知らないといふことはない筈だ。一体、君は何處からはいつて來たんだ。』と、甲乙言ひ爭つて居ると。この家のボーイが廊下を駈けて來て、ドアーの外から

『只今、こちらに當つて、ひどい音がいたしましたが、御主人樣お部屋には別に變りはありませんか。』と、いふを甲は聞き。ハテな、これには何か變き仔細あらんと、突嗟の間に思ふたので、

『あゝ、こゝには何も變りはないよ、外をよく調べて御覽。』と、いつたので。ボーイは室へ這入らず、そのまゝ外へ出ていつた。甲はボーイの去つたのを見、更めて乙に向ひ

『では、君に聞くことがある。先刻君のところへ電報を打つたのだが、それは受取つたらうか。』

乙『あ、君から先刻「キウヨウデキタスグコイ」、といふ電報が來たので、すぐこちらへ來やうと思つて、自轉車で停車場へ駈けつけたところが、君……汽車の出て了つた後ぢやないか。それで、次ぎの發車時刻まで待つよりは自轉車で來た方が早いと思ふたので、汽車で來ることを變更し、自轉車を飛ばして來た。ところが、途中斯く〳〵の次第でその後は影えがなくなつてしまつたのだ。』甲はこれを聞いて、『それはどうも不思議だ』乙も亦、『實に妙だ。』と、いうて居るところへ、さきに外へ出ていつたボーイが戻つて來て、ドアの外から

『御主人樣、どうも不思議なことがあります。表へいつて見ましたところ、表門は閉ざされてゐるのに、門内に一臺の自轉車があります。それで邸内隈なく搜しましたが、誰が乘つて來たのか更に乘人の影も見えません。』と、いひおいて彼方へいつて了つた。

茲に於て、その如何なる理由によるかは不明であるが、兎に角、事實としては、乙は自轉車で宙を走つて來て甲の門を乘越え、門内に入るや、自轉車は下へ落ち、その身は甲の居室の硝子戸も開けず破らずに、そのまゝ室内に這入つたのであります。

この事象は、右の乙なる人が其當時、ノートへ認へて置いたのを、其後彼國の雜誌に掲載され、それを我國の或雜誌に轉載されたのであります。その記事の末項には乙なる人が、

『その前に於ても、その後今日までにも再び斯くの如き事象に遇ふたことはない。』と附記してあります。

それは尤もなことで、右の乙なる人は修養しての結果、そのやうに靈力が作能したのではなく、何かの動機で突如として彼の體軀

に偉大なる靈能が顯現したのでありますから、その人は何時でも自由に靈能を發現することが出來ないのであります。今まで、お話いたしたところによつて、靈力が體内へ充滿すると、この肉體は自由自在になる。即ち空中を飛翔することも、板や硝子戸の閉つて居る家へでも、扉や窓のしめてある土藏や石造の家屋内へも自由に出入することが出來るのであります。今この日本に居たかと思ふと、遙い米國へ瞬間にこの體を現はすことが出來るのであります。ただ、幻像でなく事實肉體を現はすことが必然に出來るのであります。

肉體にて空中を自由に旅行

私は、あの汽車、汽船、飛行機等によつて旅行をするのに不便なることを痛感して居るのであります。私は一日も早く體内へ靈力を滿々たらしめ、十百千里先への旅行も、何等他のものに據らず、ただ靈力の作能によつて、而も瞬間に荷物なども携帶したるまゝ自由自在の旅行をしたいと、常に修養し念願いたして居るのであります。

重きものは罪惡なり

肉體が空中に上らないのは、罪惡があるが故であります。罪惡は實に重いものであります。

御覽なさい。彼の長らく病床に横たはり、呻吟して居るところの重病患者の體重は、その健康時と比較すると何貫匁か減つて居るのであります。それに本人は何と申しますか、身体が重くて動かれないといふではありませんか。

病氣は虛僞精神の發現したるものであるとは最に申述べて置いたところであります。虛僞精神は罪惡であります。罪惡は重いものであります。私の肉體が今日尙ほ未だ空中を飛翔することが出來ないのは、私にまだ多くの罪惡があるが爲であります。私は、今日の私の發現する靈能の程度に甘んじては居りません。日に夜に修養を進

めて居るのであります。修養とは靈性の研磨であります。靈性の研磨とは、努めて虚偽精神を斥げ、至誠の精神の生活に精進し、且過去の罪惡を滅盡することに精勵することであります。

皆さん方も、何うぞ私とともに益々修養を進められ、その肉體に大靈の力を滿たされ、大自由大自在の靈能を顯現せられむことを、衷心より熱望いたします。

靈は物質の支配を受けず、物質を支配するところのものであることは、前述の説明によつて御理解になりましたらう。つぎは靈は時間の支配を受けず、時間を超越したるものであるといふことについてお話しをいたしませう。靈は時間を超越したるものとすれば、靈には時間といふものがないのであるから、何年前の靈、何年後の靈と申すものではなく、またその時間のために變化を來さないわけであります。

正宗と村正の名刀

日本刀の名匠は、御承知の通り五郎正宗とその弟子の村正であります。今、試みに、正宗の鍛えた刀と、村正の鍛えた刀との二振りを、川の流れに立て、眺めたならば、正宗の刀は水が除けて流れ、村正の刀には水が切れて流るゝのでありませう。この二振りの刀は共に鐵であります。今、物質科學の知識を以てこれを分析しても、その兩者とも同じ成素を發見する斗りで、更に何等の異つた何物をも發見することが出來ないのであります。しかるに、一は水が除けて流れ、他は水が切れて流るゝ。これ等の事象は物質科學などでは到底説明が出來ないのであります。然らば、これ等の事象は如何なる原因に基くものであるか。その原因をこれからお話しをいたしませう。

師匠の五郎正宗は、刀は護身用にこそ必要であり、魔除けのためにこそ必要である。との信念の下に、齋戒沐浴して黙心瞑めて鍛えてゐたのであります。また、弟子の村正は、刀は切る爲に必要なるものであり、切れざれば刀に非ずてふ信念を固持して、齋戒沐

浴以て一意專念、鍛冶に努めたものであります。その兩者の精靈は、各々その物質に宿つて、幾百年を經ても更に變ることなく、靈初の通りの作能を爲しつゝあるのであります。

靈力滾々と湧出

以上の説明によつて、靈は何物にも支配されざる實在であつて、而も大自由大自在の作能を爲すものであることが、よく〳〵御理解がいつたことでせう。既に皆さん方は、斯くの如き大自由大自在の作能を現ずる、大靈の力は御體得になつて居るのであります。その既に御體得になつた、大靈の力は如何にしてこれを發現し、また如何にして是を疾病治療その他種々なることに活用すべきやは、この次ぎに力といふことについて講義をいたし、それが終ると、その次ぎに靈力顯現の秘法をお傳へいたします。秘法を御傳授いたしまするとと、忽ち皆さん方の體内より、神秘無限の大靈力は滾々として湧出し、それを顯現して疾病治療は勿論、その他あらゆることに活用なさることが出來るのでありますから御安心を願ひます。

神社佛閣の要なきや

今、こゝに説明いたして置きませぬと、皆さん方は後日にいたり、必ず疑惑を生ぜらるゝことがありますから、それに先だつてお話しいたしておきます。それは

靈力を體得したる我は、これ神であり佛であるのであります。

の要なきや。との疑問が必ず生じて來るでせう。然り、靈力を體得したる我は、是神であり佛なるが故に神社佛閣の要はないのであります。しかし神社佛閣にある神體又は佛像と稱するものは、その多くは、高德なる神官又は僧侶の方々が、衆生を濟度せんとの念願より彫刻鑄造されたか、又は靈力あらざる普通の彫刻師がこれを調製しても、それに高德なる神官又は僧侶が、衆生濟度の發願より祝詞を奏し或ひは讀經をしたるものでありますから、その神體佛像には靈力が宿つて居るのであります。

根本觀念天地の差

先輩の發現されたる靈力に敬意を表する事は謙遜であります。謙遜は至誠の精神の一つであります。至誠の精神に生きて居らるゝ皆さん方は、謙遜を忘れてはなりません。故に、先輩の靈力を顯現されたる神德、佛像の安置しある神社佛閣、如何にそれが、小祠、寺であらうとも、その神社佛閣の前を過ぐる際、又は神社佛閣に所用ありて往きたる際には、必ず、その中にある神德、佛像に敬意を表することを忘れてはなりません。

凡夫等は神社、佛閣に詣でて、一錢の賽錢を投じて、千萬金の私慾を貪んと叩頭九拜する。悟りたる我等は、先輩の發現したる靈力に對し敬意を表せんが爲に頭を下げる。兩者その形ち酷似たる如きも、その爲すところの根本觀念に於ては、正に天地霄壤の差ものならないのであります。

× × ×

誤れる神佛觀

御承知の通り、佛教には千齣盆會といふ行事があります。此千齣盆會を行ふの由來は如何なる思想から出たものであるかは姑く措き、實際に於て、現時佛教信徒が千齣盆に就ての思想は「お盆には佛様が家へ來なさる、そしてお盆の十六日（ところによつては十七日）にはお寺へ詣つていきなさる。お盆のうちは佛様が家へ來てゐなさるのだから喧嘩爭ひなどはやつてはならぬ、つまり不淨の心を起してはならぬ。」と、いふのであります。

即ち、お盆中は佛が家へ來て見てをるから惡いことをしてはならぬといふのであります。然らば、この思想を裏から見ると「お盆過ぎれば、佛様は寺へ詣つて見て居らないのだから、惡いことをしてもよい。」と、いふことになるのであります。

又、國務大臣に就職すると、伊勢大廟に報告又は感謝のための參詣をすることが、新聞に報道されるが、退職すると報告にも感謝にも參詣したることがないやうであるが、隨分勝手のいゝことではありますまいか。惡事すれば神様へ報告したり感謝したりして、野に下れば神様には知らぬ顔の半兵衛を極め込む。これでは、神様をおもちやにして居るといはれても辯解が出來まい。

それは兎も角として、さきに申した佛教に於けるお盆といひ、また、この神道に於ける神詣でといひ、何れも、神佛に對する誤れる思想の發現であります。

正しき神佛觀

以上の佛教徒、敬神徒の神佛觀は、神は社祠の中に在す。佛は寺院のうちに在す。といふにあります。これは洵に愚思想であります。なぜかと申せば、斯くの如き思想で居ると、社祠や寺院に參つた時のみ淨心を起し、その他、常住に於ては不淨心即ち邪念邪惡の生活を爲すにいたるのであります。まことにこれは危險なる思想であります。

神佛は我と共にあり

泰山教に於ては、（神佛）宇宙大靈尊は宇宙に遍滿してお在す。故に何處にもお在す。我と共にお在す。我は宇宙大靈尊（神佛）に抱擁されて居り、我の中に宇宙大靈尊（神佛）在ます。と諦觀してをります。この神佛觀が正しいのであります。斯く諦觀してこそ、神佛は我とともに常住さるるのであるから、我の心の働きも、行動も常に神佛は觀してをらるゝ、依つて陰陽のことは出來ない、いつも至公至平光明の生活をせねばならぬとの信念に生きることになるのであります。古歌に

心さへ誠のみちにかなひなば
いのらずとても神やまもらむ

と、いふのがあります。この歌の意味は、神社、佛閣になど祈らずとも、心に誠あれば、卽ち至誠の精神であれば、神これを守る神が護るとは、災厄苦惱がなく、光明圓滿の生活が出來るといふことであります。

「神佛は我の外にあり。」との思想は、我を闇黑にするのであつて、「神佛は我と俱に在り、我神佛なり。」との悟覺の我こそ、當に光明榮樂の生活ができるのであります。

金のために上下さるゝ神樣

我國では、鄕社、村社、縣社といふ風に社格をつけて置く。この資格は、その神社にある基金の額の多少に由つて斯かく差別が付くのであります。同じ祭神の社祠でも基金が多ければ上位の資格を得、基金が少ければその位は下になる。社祠は卽ちその祭神の在ますところである。しからば、その社祠の資格の低いところに在ます神は、隨つてその資格の低い神となる。同じ祭神でありながら、甲の地では資格が上り、乙の地では位が下がる。これは洵に可笑なことではありませんか。基金の多少によつて人間のために神樣が上げ下げされる。神は人間以上の偉大尊貴の本體で、人間を支配するところのものである。しかるに、斯くの如く人間によつて支配さるる神ありとせば、それは神でなくて、人間以下の者といはねばならぬ。

しかし、神は皆さん方が御承知の如く、絕對尊貴の御方である。それを人間が、金の多少に由つて、上下するとは滯越至極、不屆千萬と申すべきであります。

盲神と聾佛

我國の、神社、佛閣に於ては、その神前、佛前に、燈明なるものを點ずるが、眞の神佛は常に一切を遍照透見してお在すので、燈火などの必要を感じはなさらない。もし、燈火なければ見えないやうな神佛であるならば、それは、眞實の神佛でなく、盲目てふ不具なる神佛といふべきであります。明かるき心が神佛であることを覺らず、暗き心を持ち乍ら、燈火を神佛の前に點ずれば良いと思

ふ凡夫の淺ましさ、洵に氣の毒に堪えない。我等は憫れなる彼等の心に一大靈燈を點じて、その迷暗を照破してやらねばなりません。

また、神社、佛閣では鉦や太鼓を鳴らし、雷聲を發して、祝詞や讀經をするが、眞の神佛は、聲なきに聞くの玄妙體であります。もしそれ、聲雷なくては聞こえない神佛ありとせば、それこそ、不具なる惡むべき聾の神佛といはねばなりません。呵々。

第十二講　力篇

力の實體

力とは目擊し得ざる作用を申すのであります。世に力學といふ一箇の學問があります。世にある力學なるものは、力について如何なる定義を下して居るか知れませんが、私は、力とは其の種類の如何を問はず、その大小强弱を論ぜず、凡て肉眼で認め得ざる作用をいふのであると信じます。

水の力、火の力、風の力、電氣の力その他如何なる力でも、肉眼で認むることの出來ない作用であります。今、皆さん方が手にして居らるゝところの、鉛筆や萬年筆は數匁又は拾數匁の重量があります。それを支えて居なさるその力、また皆さん方の身體は拾數貫匁あります。その身體を自宅より、此處まで運んで來なさるには、それを支ふる力があればこそであります。然るに、それ等の力は肉眼で認むることが出來ませうか。認むることが出來ますまい。

斯くの如く、凡そ力と申すのは、その種類や大小强弱の別なく、如何なる力でも肉眼で認め得ざるところのものであります。

自己の力を限局するの弊

然り、しかして、人間は自己の力に對し、自らこれを限局するの弊があります。假令ば、米一俵を支ふる力が、男一人前の力量であると。一人前の力を限局する。ゆゑに、二俵米を支ふる者を見ては、あれは强力である、……生れ乍らの大力である。などと驚

するのであります。しかるに、もし附近より出火したる場合には、その損失を免れんと、一生懸命に家財道具を運び出す。率ひに類焼の難を免れて後、さきに運び出したる家財道具を家内へ運び入れんとするに際し、二十數貫匁の重量ある品、この品はさきに運び出す際には人手を借らず、確に自分獨りで運び出したるものなるに拘はらず、今は、何うしても自分獨りの力では運び入れることが出來ぬ。といふやうなことは、火災あつたのちに於て、よく見聞するところで、定めし皆さん方の中にもかういふことを御見聞になつた方がありませう。

火事の場合に出した二十數貫匁の力、それは他人の力ではなく、自分みづから出した力であります。然らば、何時にてもそれだけの力を出さうとすれば出るはずであるのに、火事濟んでからは、その力が何うしても出ない。これは一体どうしたわけであるかと申せば、それは、先に申した通り、人間は自己の力を限局するからであります。

依賴心の結果は損失

この、自分の力に限りをつけるといふことには、そこに依賴心、即ち他人の力を借りんとするの心が生じて來るのであります。しかして、その依賴心の結果は、必然的に損失といふものを齎すのであります。

一例を擧ぐれば、彼の所謂世界戰爭前までは、我國に於て、醫學上又は化學工業に使用する藥品の多くは、獨逸國より輸入してをつたのであります。即ち日本ではできないので、獨逸から買つてゐたのであります。然るに、大正四年、世界戰爭發生するや、その後日本は獨逸に對つて宣戰を布告し、こゝに日、獨は交戰狀態を呈するに至つたので、兩國間の通商貿易は途絶して了つた。されど、我日本國内に於ては、醫學用の藥品も、化學工業用の藥品も、交戰中だからつて、一日も休みなく費消して居り、寧ろ平時よりも却つて多量に費消してゐたので、それ等の藥品は減少するばかり、獨逸からは買ふことができぬので、これが補充の道なく、隨つて日々に拂底を告げ、それ等藥品の價格は騰貴し、二三倍より甚だしきは四十倍百倍までに昂騰した物さへあつた。いくら價格が騰つて

も、その藥品の補充ができるならばよいが、毎日費消するだけ減るばかりで更に補足ができないといふのですから、當事者等の心配は一通りではなかつた。茲に於て我國の學化學者は、之ではならんと、勇氣を鼓舞し、粉骨碎心の覺悟を以て、日夜精研究の結果、確足驅け三年の間に於て、從來獨逸から輸入を仰いで居た藥品中の約三分の二は立派に我國に於て生產さるゝことになり、而もこれが市價は獨逸よりの買價に比すれば頗る低廉であつたのであります。

之に依つて見ますれば、日本の力ではできない、獨逸の力でなければ出來ない。と、日本は自己の力を限局し數十年の長き間、獨逸の力に依賴心を起して來た、その結果は數十年に亘り莫大なる損失を招いて居つたのであります。

國家も個人も同理であつて、自己の力を限局するに於ては、何事か爲さんとするときには、必ず他の力を藉りんとするのであります。他の力を藉りんとするは卽ち依賴心であります。依賴心は損失といふ結果を生ずるものであります。

大自由大自在の作爲

大靈の力は、大自由大自在無碍なる絕大の偉能を現ずるものであります。今や、皆さん方は、この大靈の力を体得されたのであります。故に成さんとして成し得ざることなく、遂げんとして遂げ得ざることなきは明瞭なることであります。

もし、將來に於て、成さんとして成し得ざることあり、遂げんとして遂げ得ざることあらんか、汝は、体得したる靈力の微弱を立證するものなるが故に、未だ靈性研磨の足らざるを悟り、勇往精進、努めて虛偽精神を去り、益々至誠の精神を以て日夜の生活を爲し、增々大靈力を增進し、以て大自由大自在の作爲を顯現せられんことを切望いたします。

天上天下唯我獨尊

宇宙大靈の意は、大慈悲を以て一切萬有を育成し靈化されつゝある、至上至尊の本體であつて、しかも、大自由大自在無碍圓滿の作爲を現ずるところのもので、天上天下、之より尊き御方はないのであります。天上天下唯我獨尊とは　宇宙大靈尊を申

すのであります。しかして　宇宙大靈の力を體得したる我が、卽ち　宇宙大靈尊であります。

皆さん方は既に　宇宙大靈の力を體得されたのであります、故に皆さん方は、天上天下唯我獨尊であるのです。大靈力を體得せざる凡夫等は、一切の物の支配を受けて居り、バイキンと稱する最微のものにまでも支配さるるを見れば、バイキンよりも眞しきものであることが明瞭で、少しも尊い光りを認むることが出來ないのであります。況んや天上天下唯我獨尊たるの光明に於てをやであります。

天上天下唯我獨尊の意義を悟らず、行ひこれに伴なはず、天上天下唯我獨卑たるに氣づかずして、妄に、天上天下唯我獨尊などと誤稱しつゝあるの凡夫等は、實に氣の毒にも愚なるものであります。

力の發現の原理

さて、力なるものは、その種類の何たるを問はず、その强弱大小を論ぜず、如何なる力でも、力と申すのは、肉眼で認むることのできない作用であるといふことは、さきの說明によつて御理解がいきましたが、今度は、その力なるものが、如何にして現はるゝものであるかを說明することにいたしませう。

今、皆さん方が、手に持ちなすつた、その數匁の鉛筆や十數匁の萬年筆を支ふるの力、又十數貫匁のその肉體を自宅より此處まで運んで來る力なるものは、肉眼で認め得ざる作用であることは、既に明瞭に御理解になりましたが、しかし、その力は如何にして出たのでありませうか、それを之から御說明申し上げます。

その力こそは、精神作用の現はれであります。卽ち、私の說くところをそのノートへ筆記せんとする。御自分の精神作用が、數匁十數匁の鉛筆や萬年筆を支ふる力となつて現はれ、自宅より此處へ來つて私の講演を聽かんとする御自分の精神作用が、その十數貫匁の肉體をこゝへ運んで來る力となつて顯はれたのであります。

大靈力は如何にして顯現するか

斯くの如く、精神作用の現はれたのが力であります。しかして、その力の強弱大小はそれを現ずる精神の如何にあるのであります。

宇宙大精神は　宇宙一切の精神物質卽ち一切の現象を支配する偉能力の本體であります。しかして　宇宙大精神—宇宙大靈の發現したるものが、我・であると悟覺したる我・これ卽ち大我・であります。故に、大我の精神は　宇宙大精神にて宇宙大靈と稱す。而して　宇宙大靈の作能は、まことに至玄至妙にして、絕大無限の偉力を現ずるものであることは既に御明解になつて居らるゝのであります。

皆さん方は、既に大我に悟入せられ、大靈の力を體得されて居るのであります。然らば、既に御體得になつた大我の精神の力、卽ち大靈の力は、如何にしてこれを發現すべきや、また、發現したる大靈の力の活用等は如何なる方法によるべきや。

これ、これより秘法として御傳授いたしますから、一字も違はぬやうに筆記し、また讀誦することにして下さい。

（中篇）終

昭和七年十一月十日　納本
昭和七年十一月十五日　發行
昭和十二年三月廿日　再版

泰山教學講授錄中編（奥付）非賣本

著者　加藤泰山
福島縣若松市馬場上一之町六番地
發行者　加藤晃
新潟縣三條市一之木戸三五八番地
印刷者　小林金資
新潟縣三條市一之木戸三五八番地
印刷所　小林印刷所

不許複製
禁轉載

發行所　大日本哲學院教學部
會津若松市馬場上一之町六番地
振替口座東京七三九二七番

372
244

終